

富士宮市文化財調査報告書第42集

国指定史跡

# 千居遺跡範囲確認調査報告書

—富士山世界遺産登録推進事業に伴う遺跡範囲確認調査報告書—

2010

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第42集

国指定史跡

# 千居遺跡範囲確認調査報告書

—富士山世界遺産登録推進事業に伴う遺跡範囲確認調査報告書—

2010

富士宮市教育委員会

# 例 言

- 1 本書は、静岡県富士宮市上条字千居1818の9他に所在する国指定史跡千居遺跡の、富士山世界文化遺産登録推進事業に伴う遺跡範囲確認調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、平成20年・21年度国宝重要文化財等保存整備費補助金と静岡県文化財保存費補助金を受けて富士宮市教育委員会が実施し、平成20年度に遺跡範囲確認調査及び範囲確認調査用基準点測量を、平成21年度に報告書刊行事業及び地形測量を実施したものである。
- 3 事業の期間は、平成20年度事業を平成20年7月1日より平成21年3月20日まで、平成21年度事業を、平成21年7月1日より平成22年3月20日まで実施した。

- 4 本発掘調査は、史跡指定地周辺の下記の場所にて実施した。  
富士宮市上条1822-14 (トレンチ1) / 富士宮市上条1822-13 (トレンチ2~4)  
富士宮市上条1822-20 (トレンチ5) / 富士宮市上条1816-6 (トレンチ6)  
富士宮市上条1841-7 (トレンチ7) / 富士宮市上条1841-5 (トレンチ8)  
富士宮市上条1818-8 (トレンチ9) / 富士宮市上条1818-9 (トレンチ10)

- 5 本事業は、以下の体制で行った。

<平成20年度>

富士宮市教育長 佐野敬祥

富士宮市教育委員会 教育文化課長 渡井一信

富士宮市教育委員会 教育文化課 主幹兼係長 馬飼野行雄

主 幹 佐野亨

囑 託 員 佐野恵里

調査補助員 金森弘毅・斉藤之弘・堤健一・

古郡善明・渡邊剛・渡辺敏雄

調査作業員 大平美奈子・山崎美英子

整理作業員 佐藤節子・渡辺麻里

<平成21年度>

富士宮市教育長 佐野敬祥

富士宮市教育委員会 教育文化課長 渡井一信

富士宮市教育委員会 教育文化課 主幹兼係長 馬飼野行雄

主 幹 佐野亨

囑 託 員 佐野恵里・石文佑弥

整理作業員 佐藤節子・渡辺麻里

- 6 本書の執筆は、以下のとおりである。

第II章第1節 馬飼野、第V章 石文 以外 佐野(恵)

- 7 本発掘調査及び報告書刊行事業に伴う写真撮影は、馬飼野と佐野恵が分担して行った。
- 8 本書の編集・印刷・出版に関わるすべての事務は、富士宮市教育委員会が行った。
- 9 本書に記載する資料は、特に注のある場合を除き、すべて富士宮市教育委員会が保管している。
- 10 本事業にかかわる協力者は以下のとおりである(敬称略、五十音順)

池谷信之 小野真一 北垣俊明 小金澤保雄 小崎晋 宗教法人大石寺 西原真功

野村昭光 原田雄紀 望月勝美 望月盈敏 若林新一

## 凡 例

- 1 挿図中に示す座標は、世界測地系を用いた測量値である。方位は、真北を示している。
- 2 挿図中で、第Ⅰ・Ⅱ次調査区と本調査での測量成果とを掲載した図は、現地調査成果を元に、第Ⅰ・Ⅱ次調査成果の報告書掲載図を用いて合成して作成した。
- 3 挿図中に示すトーンは以下のとおりである

 … 攪乱       … 磨り面       … スス

- 4 土器観察表の胎土欄に示す略語は、以下のとおりである  
英・長…石英・斜長石・正長石などの無色鉱物  
有 …角閃石・輝石・かんらん石などの有色鉱物  
雲 …雲母 いわゆる金雲母  
砂 …砂粒
- 5 土器観察表の色調は、土器の最も広い範囲を専有する色合いを原則として取り上げている。色調は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）による。



# 目 次

第I章 位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	5
第II章 調査の概要	
第1節 調査の経緯	8
第2節 調査の経過	9
第3節 調査の方法	9
第4節 層 序	10
第5節 過去の調査について	11
第III章 遺 構	
第1節 各トレンチの様相	14
第IV章 遺 物	
第1節 土 器	27
第2節 石 器	39
第3節 土製品	41
第V章 第I・II次調査出土土器に関する所見	50
第VI章 まとめ	65

# 挿 図 目 次

第1図 富士宮市の位置	1	第23図 10トレンチ実測図	26
第2図 遺跡周辺地質図	2	第24図 3・5トレンチ出土土器実測図	27
第3図 縄文時代中期の遺跡分布図	4	第25図 6トレンチ出土土器実測図①	29
第4図 周辺の遺跡分布図	6	第26図 6トレンチ出土土器実測図②	30
第5図 トレンチ配置図	10	第27図 6トレンチ出土土器実測図③	31
第6図 土層柱状図	11	第28図 6トレンチ出土土器実測図④	32
第7図 調査区周辺地形図	12	第29図 6トレンチ出土土器実測図⑤	32
第8図 第I・II次調査遺構分布図	13	第30図 7トレンチ出土土器実測図①	34
第9図 1トレンチ実測図	15	第31図 7トレンチ出土土器実測図②	35
第10図 2トレンチ実測図	15	第32図 7トレンチ出土土器実測図③	36
第11図 3トレンチ実測図	16	第33図 7トレンチ出土土器実測図④	37
第12図 3トレンチSK1・SK2実測図	17	第34図 出土土器実測図	38
第13図 4トレンチ実測図	18	第35図 8トレンチ出土土器実測図	39
第14図 5トレンチ実測図	18	第36図 出土土器実測図①	40
第15図 6トレンチ実測図①	20	第37図 出土土器実測図②	41
第16図 6トレンチ実測図②	21	第38図 土製品実測図	42
第17図 6トレンチ遺物分布図	22	第39図 第I・II次調査出土土器実測図①	58
第18図 6トレンチSK1・SK2実測図	23	第40図 第I・II次調査出土土器実測図②	59
第19図 7トレンチ実測図	23	第41図 第I・II次調査出土土器実測図③	60
第20図 7トレンチ遺物分布図	24	第42図 第I・II次調査出土土器実測図④	61
第21図 8トレンチ実測図	24	第43図 第I・II次調査出土土器実測図⑤	62
第22図 9トレンチ実測図	25	第44図 第I・II次調査出土土器実測図⑥	63

## 挿 表 目 次

第1表	湧水地名表	3
第2表	過去の調査歴	9
第3表	出土石器観察表	43
第4表	出土石器観察表	49
第5表	出土土製品観察表	49
第6表	第Ⅰ・Ⅱ次調査出土石器観察表	64
第7表	各文様毎の出土量(住居)	52
第8表	各文様毎の出土量(配石)	52
第9表	各文様毎の出土量(住居)	52
第10表	文様毎の出土点数(遺構判出土器)	52
第11表	文様毎の出土点数(遺構外出土器)	52
第12表	全出土器の文様毎の出土点数	53
第13表	第Ⅰ・Ⅱ次調査時出土器の時期別の出土点数	53
第14表	滝戸遺跡縄文中期の土器の出土点数	54
第15表	滝戸遺跡曾利式と加曾利E式の出土点数	54
第16表	滝ノ上遺跡縄文中期の土器の出土点数	55
第17表	天間沢遺跡縄文中期の土器の出土点数	55
第18表	破魔射場遺跡縄文中期の土器の出土点数	56
第19表	破魔射場遺跡曾利式と加曾利E式の出土点数	56
第20表	箕輪遺跡縄文中期の土器の出土点数	56

## 写 真 図 版 目 次

図版 1	1. 千居遺跡現況/ 2. 千居遺跡空撮 (加藤学園考古学研究所1975『千居』より転載)
図版 2	1. 1トレンチ完掘状況/2. 2トレンチ完掘状況
図版 3	1. 3トレンチ完掘状況/2. 4トレンチ完掘状況
図版 4	1. 5トレンチ完掘状況/2. 6トレンチ完掘状況 (東側)
図版 5	1. 6トレンチ完掘状況 (西側) /2. 6トレンチ遺物出土状況
図版 6	1. 7トレンチ完掘状況/2. 7トレンチ遺物出土状況
図版 7	1. 8トレンチ完掘状況/2. 9トレンチ完掘状況
図版 8	1. 10トレンチ完掘状況/2. 出土土器 (曾利式土器)
図版 9	1. 出土土器 (加曾利E式土器) / 2. 出土土器 (その他の土器)・土製品 (土器片円盤・土器片鏝)
図版 10	1. 出土石器 1 /2. 出土石器 2
図版 11	1. 第Ⅰ・Ⅱ次調査出土土器 1 /2. 第Ⅰ・Ⅱ次調査出土土器 2
図版 12	1. 第Ⅰ・Ⅱ次調査出土土器 3 /2. 第Ⅰ・Ⅱ次調査出土土器 4
図版 13	1. 第Ⅰ・Ⅱ次調査出土土器 5 /2. 第Ⅰ・Ⅱ次調査出土土器 6

付図 千居遺跡地形測量図

## 第1章 位置と環境

### 第1節 地理的環境(第1～3図)

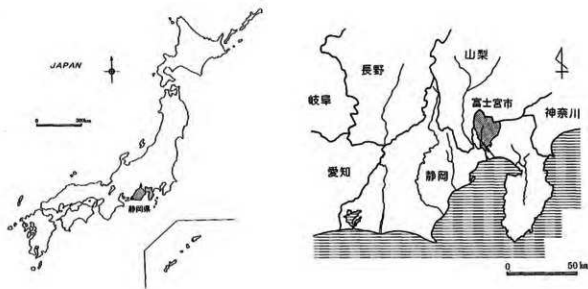
国指定史跡千居遺跡は、静岡県富士宮市上条字千居1818-9他に所在する。富士山西麓の標高400m付近に位置する。

富士宮市は、富士山の南西麓から天子山地までの丘陵及びその間を流れる潤井川沖積地を市域としており、北端は山梨県境となる。広ぼうは東西19.50km、南北29.04km、面積314.81平方kmである。標高は、富士山頂3,776mから潤井川沖積地の35m(石の宮地区)までとなっており、市域の高低差が非常に大きくなっている。

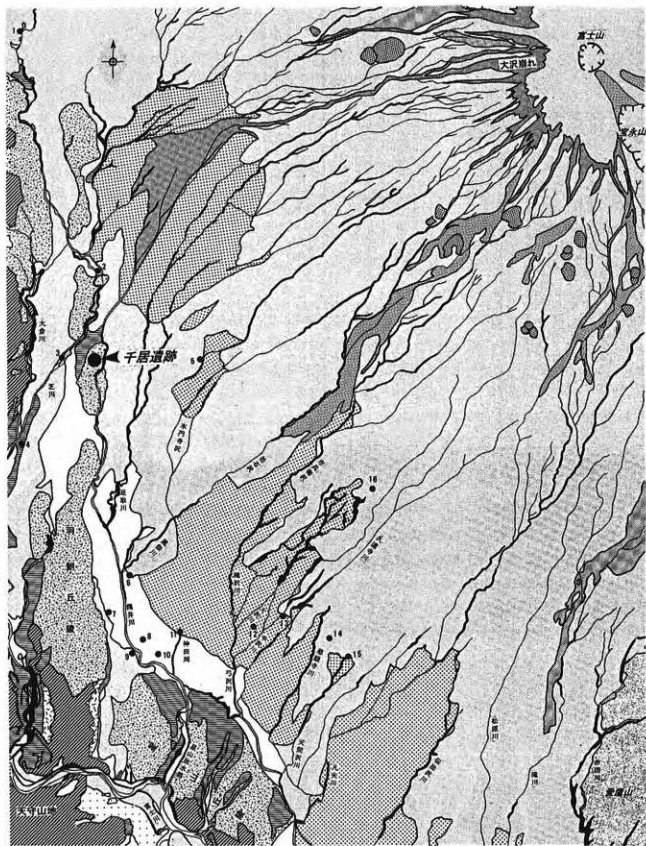
富士宮市域の地質は、富士山の火山活動による火山噴出物によって形成された丘陵地帯、富士山が形成される以前の新第三紀の天守山地、潤井川沖積地に大きくわけることができる。天守山地は富士山の北側にある御坂山地から連続する山地で、富士山北西麓を西側に回りこむように連なり、富士川に接している。富士山の溶岩流は、北から西はこの御坂山地や天守山地、南は駿河湾や愛鷹山地、東は箱根山地や丹沢山地まで達し、広大な丘陵地を形成しており、富士山南西麓を占める富士宮市はその多くが富士山の丘陵地帯となっている。

富士山丘陵と天守山地の間には、富士山麓に源流を持つ潤井川や芝川といった河川が流れており、どちらも天守山地や富士山丘陵に挟まれて幅の狭い沖積地となっている。また潤井川右岸の羽船丘陵や星山丘陵には断層が多く、断層の活動によって断層崖が形成され、各丘陵が分断されている。断層には、活断層と考えられている大宮断層や安居山断層、安政の大地震(安政元～2年(1854～1855))の際に活動したことが確実な富士川断層がある。

世界有数の成層火山として優美な姿を見せている富士山であるが、活火山としての一面があり、延暦19年(800)や貞観6年(864)、宝永4年(1707)には大規模な噴火活動の様子が記録され、甚大な被害状況も知ることができる。



第1図 富士宮市の位置



<凡例>

- |  |                                   |  |            |  |                          |
|--|-----------------------------------|--|------------|--|--------------------------|
|  | 雪代堆積地・火山麓扇状地(現成)                  |  | 富士火山火山麓扇状地 |  | 崖壁                       |
|  | 側火山                               |  | 古富士泥流堆積地   |  | 扇状地・緩扇状地                 |
|  | 富士火山新期溶岩流<br>(約2,200年前以降に噴出した溶岩流) |  | 谷底平野・氾濫原   |  | 第三紀や第四紀の地層からなる山地<br>や丘陵地 |
|  | 富士火山旧期溶岩流<br>(約2,200年以前に噴出した溶岩流)  |  | 急崖         |  | 愛鷹山火山                    |
|  | 河岸段丘                              |  |            |  |                          |

第2図遺跡周辺地質図

第1表 湧水地名表

1	猪之頭湧水群	6	淀師洪沢	11	湧玉池
2	白糸の滝	7	大中里釜田	12	小泉八幡宮
3	椿沢	8	大中里方辺	13	大岩出水八幡宮
4	精進川	9	大中里よしま池	14	杉田新製の水飲み場
5	北山志田水	10	西町羽衣	15	杉田滝ノ上不動尊
				16	村山浅間神社竜頭の滝

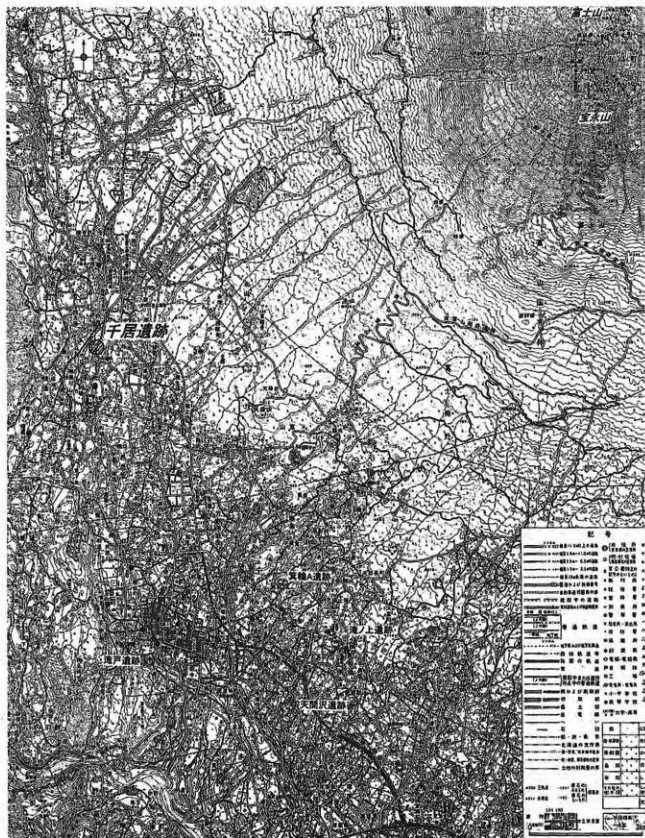
富士山の広大な裾野の形成は、いくつかの段階を経てなされるとされる。約10万年前から約1万年前に、富士山の前身の小御岳火山を覆うように、大規模な噴火活動によって古富士火山と呼ばれる山体が形成される段階、約1万年前から現在は、新富士火山と呼ばれる噴火活動の段階にあるといわれる。

新富士火山期の約1万年前から約8,000年前とされる初期の段階では、大規模な噴火活動に伴い、大量の溶岩を噴出させてほぼ現在の姿を形成したと考えられており、富士山南西麓の縄文時代の遺跡は、この新富士火山期のローム層と言われる火山灰層上部から見られるようになる。その後も、約8,000年前から約2,200年前までは、大規模や小規模な山頂噴火や側噴火を繰り返す噴火活動をし、約2,200年前から現在は、小規模な側噴火の段階にあるとされる(国土地理院2003)。富士山北麓に溶岩を噴出させた貞観年間の噴火や、富士山東麓から遠く江戸まで火山灰を降下させた宝永の噴火の様相がこの時期にあたる。

この間、富士山南西麓では、先述のローム層の上部に、富士黒土層、栗色土層、黒ボク土層、大沢スコリア層が堆積する。通常、富士山の火山灰は偏西風によって東方に飛ばされるので、それぞれの噴火活動の影響を富士山南西麓で知ることができる場所は少なく、富士山南西麓で見ることができる火山灰層は、ローム層と大沢スコリア層のみである。大沢スコリア層は、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構確認面となっている。

富士山麓の特徴の一つに、豊富な湧水が挙げられる。古富士火山の噴出物である古富士泥流層の性質と、その後の新富士火山が噴出させた溶岩が冷えて固まる際にできた溶岩内の構造が起因して、富士山麓に湧水が点在するようになっていていると考えられている(土2002)。富士山東麓麓の柿田川湧水群(清水町)や小浜池(三島市)のように、富士宮市域にも数多くの湧水が点在している。代表的な湧水地は、富士山南西麓の富士山本宮浅間大社の境内地にある湧玉池(天然記念物)(第2・3図11)、大中里よしま池(同図9)をはじめ、富士山西麓の白糸の滝(名勝・天然記念物)(同図2)、猪之頭湧水群(同図1)などを挙げることができる。

しかしながら、富士山の丘陵にはかつては天水に頼るしかない土地も多く、湧水が見られない地域や、沢はあっても濡れ沢であるそういった地域では、土地の開発のために中世から近世にかけて水の豊富な場所から樋を通して畑地の開発を行っている歴史がある。千居遺跡のある上野地区もそういった地域であったようで、千居遺跡西側にある大堰川は、現在は水力発電所に水を供給しているが、かつては北方の芝川から水を引き入れた用水であり、それによって農地の開発が進んだとされる(渡井・伊藤2002)。千居遺跡の東を流れる潤井川も、現在でこそ水が常時流れる川であるが、これは上流で芝川水系からの落ち水があるためであるとされ、以前は降雨時にのみ水が流れる濡れ沢であったらしい(渡井・伊藤前掲)。実際、潤井川流域の遺跡分布を見ると、用水の発達した地域の遺跡分布は疎となっている。



第3図 縄文時代中期の遺跡分布図

潤井川は、富士山頂から始まる大沢崩れを源頭にしており、この大沢崩れは約1,000年前から崩落がはじまったと考えられている。現在は、富士山西麓にまわると、頂上付近より山肌が大きく抉れた部分が見えるが、千居遺跡の縄文時代中期後半から終末の時期には見られなかった光景であろうか。この崩落により、潤井川上流部では土砂や礫の堆積が著しく、千居遺跡の周辺一帯が「大石原」との地名を持つ由来ともなっている。

千居遺跡は、星山丘陵や羽船丘陵と同じような古富士泥流堆積地上に位置する。千居遺跡周辺は、現在では植林が広がって現地形はわかりにくいですが、新富士火山の溶岩流中の丘状の高まりとなっている。その南西方向に緩やかな傾斜をもつ丘陵上の平坦面に、配石遺構や住居跡を構築している。

千居遺跡の東方を流れる潤井川は、深い谷となって南流しているが、前述のとおり縄文時代中期後半から終末にかけての時期には、潤れ沢であった可能性があるため、千居遺跡の水源はどこに求められたのかと思われるが、昭和45・46年(1970・1971)調査時には、遺跡の西南方では、湧水が見られたというので、局所的に湧出する場所があったのかもしれない。

## 第2節 歴史的環境(第3・4回)

千居遺跡は、縄文時代中期後半から終末の集落跡及び大規模な配石遺構が発見された遺跡で、国指定史跡(昭和50年(1975)指定)となっている。

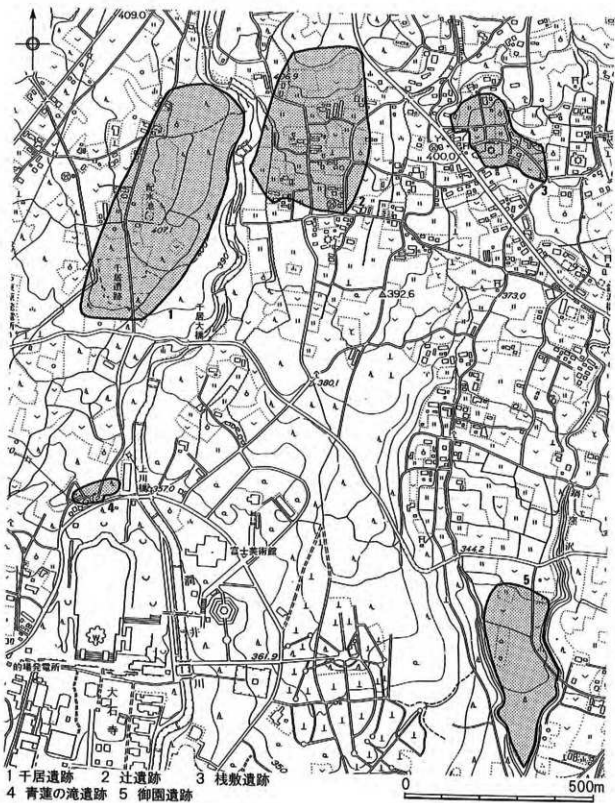
富士山南西麓を占める富士宮市域では、縄文時代中・後期の遺跡数が最も多く、中でも、縄文時代中期後半の遺跡が多い。第3図は、縄文時代中期遺跡の場所を図示してあるが、遺跡の分布は、富士山南西麓の標高500m付近に位置する村山浅間神社遺跡を頂点に、村山・大岩・小泉・杉田といった、湧水があり河川の発達した地域や、湧水地が集中する大中里といった地域に比較的密集する傾向がある。そのほか、現在でも富士川を挟んで架橋される交通の要所である沼久保周辺に点在したり、沼久保から北側の富士山麓側に向かう星山丘陵上に点在している。

しかしながら、千居遺跡は、そういった遺跡の分布域とは全く異なる場所に立地している。富士山西麓の標高400m付近に位置し、直線距離で7～10kmほど離れている。縄文時代中期の遺跡では、周囲には青蓮の滝遺跡(4)があるのみである。その他の遺跡は、辻遺跡(2)、棧敷遺跡(3)、御園遺跡(5)といった、奈良・平安から中世・近世にかけての遺跡が点在している。

富士山南麓と富士山北麓の山梨県側とは、富士山麓の山裾を、東海道の吉原宿(富士市)から大宮(富士宮市)を経て甲府まで、交易ルートである中道往還が結ばれていた。この道は、現在の国道139号線や果道414号線に引き継がれるなど、時代による変遷は想定されているが、地形的に考えて大きな変化はないと考えられる。千居遺跡は、この中道往還のルート付近に位置している。

富士山南西麓の縄文時代中・後期遺跡は、中期から後期前半の配石及び集落が確認された滝戸遺跡、中期中葉から後半の配石及び墓域が確認された滝ノ上遺跡、広範囲の調査は行われてはいないものの、戦前より知られ、住居跡が確認された中期から後期前半の箕輪A遺跡、中期の集落が確認された天間沢遺跡(富士市)が挙げられる。千居遺跡は、曾利式土器後半から終末にかけての時期に限定される遺跡であるが、これらの遺跡は、前代の曾利式土器前半あるいは勝坂式期から継続する遺跡や、さらに後代の堀之内式期へと継続する遺跡であることが多い。

また、それぞれの遺跡においては、縄文中期後半の曾利式期には遺跡の規模が拡大し、最も隆盛を迎える。滝戸遺跡では、曾利Ⅱ式期に住居跡を構築した場所に、曾利Ⅲ～Ⅴ式期には環状の配石や埋甕を配するようになっていく。滝ノ上遺跡では、中期後半の配石墓や配石を構築しており、曾利Ⅴ式



第4図 周辺の遺跡分布図



や加曾利E 4 式の土器を多く出土している。天間沢遺跡では、中期中葉の勝坂式期後半から曾利V 式まで集落を継続して構築しており、天間沢遺跡VI・VII期とされる曾利IV～V 式にかけては、集落の北東方、直線距離で約100mの丘陵上に配石を構築している。この天間沢遺跡は、前述の滝ノ上遺跡から南西方向に直線距離で2 kmほど下った丘陵上に位置しており、比較的近い距離間にある。このほか、市内の小規模な発掘調査が行われた遺跡でも、曾利式後半期の遺物や遺構を確認することが多く、富士山南西麓では、縄文時代中期後半に遺跡数が増加し、規模も拡大する傾向がある。中期後半でも、曾利式土器後半の曾利III～V 式期において特に増加する。なお、この時期は、加曾利E 式土器の流入が見られるようになる時期でもある。

後代の後期には、称名寺式土器の流入が見られ、堀之内式土器に継続するが、後期前半で集落を終える遺跡が多く、滝戸遺跡、滝ノ上遺跡、箕輪A遺跡もそのような傾向にある。富士山南西麓では、後期後半以降には遺跡数が減少し、晩期にいたってはわずかに見られる程度になる。

#### <引用・参考文献>

加藤学園考古学研究所 1975 『千厩』

国土地理院 2003 「富士山 1 : 50,000火山土地条件図」

土隆一 2002 「1部 富士山の自然 1. 富士山の形成」

『富士山の自然と社会』国土交通省中部地方整備局 富士砂防工事事務所

富士市教育委員会 1984 『天間沢遺跡Ⅰ』

富士市教育委員会 1985 『天間沢遺跡Ⅱ』

富士宮市 1971 『富士宮市史』

富士宮市 1988 『富士宮市の自然 第一次富士宮市域自然調査研究報告書』

静岡県清水土地改良事務所・富士宮市教育委員会 1981 『滝ノ上遺跡』

富士宮市教育委員会 1993 『富士宮市の遺跡』

富士宮市教育委員会 1997 『滝戸遺跡』

渡井正二・伊藤昌光 2002 「Ⅱ部 富士山と人々の暮らし 2. 富士山麓の開拓の歴史」

『富士山の自然と社会』 国土交通省中部地方整備局 富士砂防工事事務所

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 第1節 調査の経緯

国指定史跡「千居遺跡」は、『富士山の西南麓のなだらかなす野に位置する縄文時代中期の集落跡及び配石遺構を主体とする遺跡である。昭和45年及び昭和46年の調査により、住居跡20余棟及びこれとやや西にずれて複合する大規模な配石遺構を検出した。本遺跡は、縄文時代に構築された特殊な石造遺構であるいわゆる配石遺構のうちでも大規模なものであり、かつ、集落跡と複合して全体が調査された点で稀有なものであり、今後配石遺構の性格を研究していく上でも重要なものである。』として、昭和50年6月26日付けで指定された。

以来、9,920㎡の指定地は出土した遺構の状態を実態的に示し、発見時の迫力と遺構の遺存状態を伝えることを目的にして、遺構面の保護のために薄い盛土と張芝による遺構展示を行い、日蓮正宗総本山大石寺によって管理されてきた。

千居遺跡について、調査者の小野真一（当時：加藤学園考古学研究所所長）は富士山の噴火と遺跡の消長、2列の列状配石が富士山に尾根筋を向ける舌状の台地を輪切りするように、同方位で富士山に対して直角に築かれていることなどから、富士山への畏敬の行為が表れた「祭祀」の場であることを説いていた。

この賛否はそれぞれであったが、近年、列島の各所で大規模な配石遺構が発見されるとともに、配石のなかの立石など特殊構造をもつ礫が山の稜線を見通すなどの事例が蓄積されて、縄文時代の自然景観（ランドスケープ）のなかで特徴的な山の存在がクローズアップされるようになり、千居遺跡と富士山との対峙関係も自ずと肯定資料として捉えられてきた。

この関係は、富士山を国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の世界遺産条約に基づく世界遺産リストに登録しようと、平成17年12月、静岡・山梨両県と関係10市町村で設置された「富士山世界文化遺産登録推進両県合同会議」が求める「富士山の顕著で普遍的な価値を構成する資産候補」の抽出にも反映されて、富士宮市は千居遺跡を推薦することになった。

平成19年1月に至り、文化庁は「富士山」を我が国の世界遺産暫定一覧表に記載することが適当と判断し、同6月のユネスコ世界遺産委員会において「暫定リスト」の追加が決定された。ここで提出された「富士山」の普遍的価値を表す構成資産候補のうち、千居遺跡は芝川町大鹿窪遺跡とともに「自然崇拜」、そのうちの遺構に關係する遺跡に位置づけられた。

この際、文化庁は「富士山」を含めた国内選定4資産の世界文化遺産登録に向けての課題を公表し、まずは資産構成等に関する改善・充実に努めることが必要として、国内外の同種遺産との比較研究を行い、本資産が持つ顕著な普遍的価値を確実に証明することを要請し、富士山に関しては「さまざまな時代の富士山に対する信仰を押さえること」を挙げてきた。

いわゆる、「価値の証明のための調査」で、千居遺跡については「自然崇拜」の証明が第一義となり、過去の調査における遺構・遺物の再検証と遺跡範囲の確定のための調査が計画され、平成20・21年度文化庁文化財保存事業費・静岡県文化財保存費補助金の交付を受けて、所有者である日蓮正宗総本山大石寺や、例言に記す遺跡周辺の地権者の協力を得て富士宮市教育委員会によって実施された。

## 第2節 調査の経過(第5・7図)

本事業は、平成20年度と平成21年度の2ヵ年に亘って行われた。

平成20年度は、発掘調査及び整理事業、基準点測量等業務委託、平成21年度は報告書刊行事業及び地形測量業務委託事業を実施した。

平成20年度の基準点測量等業務は、平成20年9月16日～10月17日に実施された。平成20年度の発掘調査は、平成20年9月3日～12月12日まで行われた。それに伴う整理作業は、平成20年度は過去の資料調査平成20年7月1日より先行して開始され、平成20年2月27日で終了した。

発掘調査は、人力での掘り下げを基本とし、1トレンチ及び、千居遺跡第Ⅲ次調査区と重なる部分に設定した3トレンチから掘り下げを行い、トレンチ番号順に掘り下げを進めた。

平成21年度は、本報告書刊行事業として、整理作業が平成21年7月1日～11月26日まで実施された。地形測量業務委託事業は、平成21年9月1日～平成22年1月29日まで実施され、本報告書に掲載する千居遺跡周辺地形図は、この成果を使用している。なお、地形図に示される遺構分布状況は、第Ⅰ・Ⅱ次調査の報告書である『千居』（加藤学園考古学研究所1975）に掲載された遺構実測図を再トレースしたもので、現地測量の成果と合わせて合成している。

## 第3節 調査の方法(第7図、第2表)

発掘調査は、今回の調査を含めてこれまでに4次の調査が行われている。いずれも加藤学園考古学研究所によって行われ、調査年次等は第1表のとおりである。今回調査は第Ⅳ次調査とした。

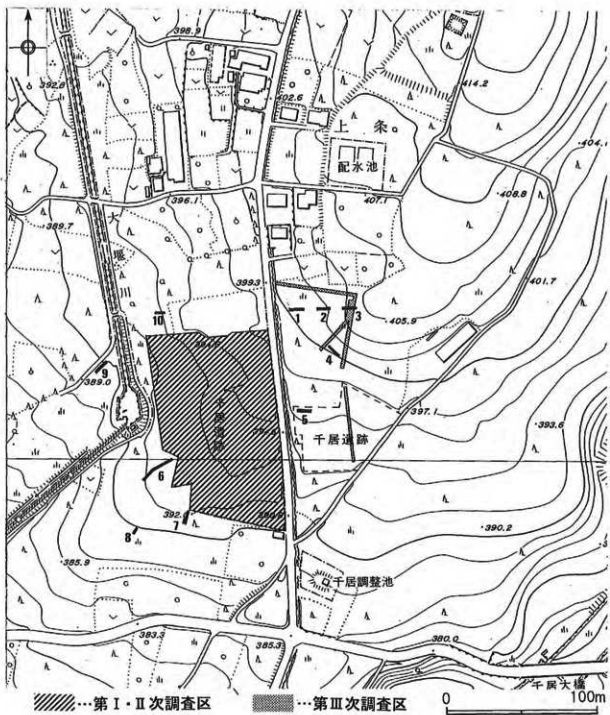
今回の調査は、前述の経緯から遺跡範囲確認を目的とし、トレンチ調査を実施することとした。トレンチは、第Ⅰ～Ⅲ次調査区を囲む範囲で任意に設定した。合計10トレンチである。

発掘は、第Ⅰ・Ⅱ次調査で遺構確認面とされた暗褐色土層(栗色土層)まで掘り下げを行い、遺構・遺物の検出に努めた。一部、下部層の確認のため暗褐色土層より下げて古富士泥流層である岩盤層まで確認したトレンチもある。

調査の記録は、現地でのトータルステーションによる測量によって各トレンチ平面図を作成し、セクション図及び遺物分布図は手実測にて実施した。

調査年次	調査年	調査概要
第Ⅰ次調査	昭和45年(1970)	史跡指定範囲の調査
第Ⅱ次調査	昭和46年(1971)	史跡指定範囲の調査
第Ⅲ次調査	昭和53年(1978)	史跡指定範囲東側丘陵斜面の確認調査
第Ⅳ次調査	平成20年(2008)	遺跡範囲確認調査

第2表 過去の調査歴

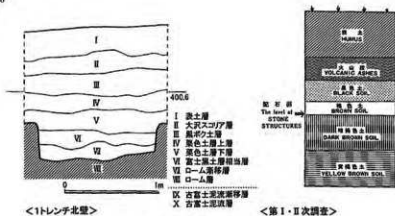


第5図 トレンチ配置図

#### 第4節 層序(第6図)

本発掘調査の層序は、史跡指定範囲の東側丘陵斜面上に設定した1～5トレンチと、史跡指定範囲の西側斜面に設定した6～8トレンチとで史跡指定範囲、小規模な谷を挟んだ丘陵部に設定した9・10トレンチの2つに特徴が分かれる。

史跡指定範囲を含む前者の層序は下記のような、富士山南西麓の基本層序がほぼ観察できたが、6～10トレンチでは、黒ボク土層・栗色土層の安定した堆積は見られなかった。これは、小規模な谷や丘陵の斜面といった土の移動がおき易い地形であることに起因すると考えられる。なお、富士黒土層は明確な堆積は見られなかったが、相当層として褐色土を充てている。



第6図 土層柱状図

#### 第5節 過去の調査について(第7・8図)

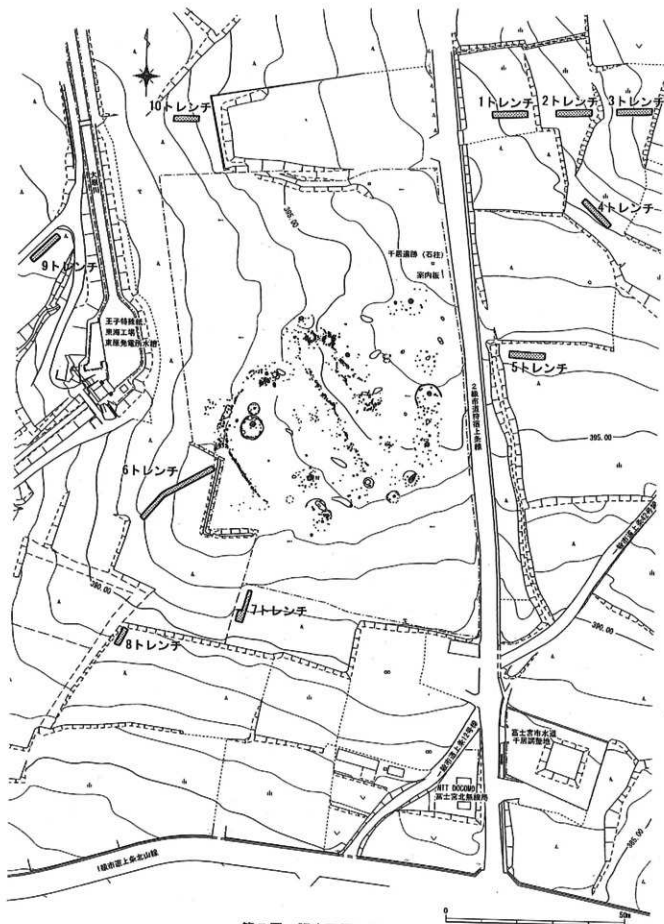
千居遺跡は、地元の方による表採がされ、戦前には知られていた遺跡であったとされる。その後、地元の高校生による小規模な発掘調査によって、配石遺構の一部を検出したことから、集落の存在が知られるようになったようで、土地を所有する大石寺が正木堂建設に際して、周辺の歴史環境を調査するという目的のために、発掘調査を実施している。

発掘調査は、まず、現在史跡指定範囲となっている丘陵部平坦面の調査を、昭和45・46年(1970・1971)の2年にわたって実施している。第I次調査では、以前から配石遺構が確認されていた丘陵部平坦面の北側から中心にかけてを主に調査したところ、配石遺構と住居跡、土坑を検出している。配石遺構は、第I次調査で史跡指定範囲内のものほとんどを調査しているが、配石部分を残した断片的な調査が行われていたり、平面的な調査のみ行われている。そのため、下部構造については不明な点が残っている。住居跡は2基のみで、土坑も4基の確認し、調査している。

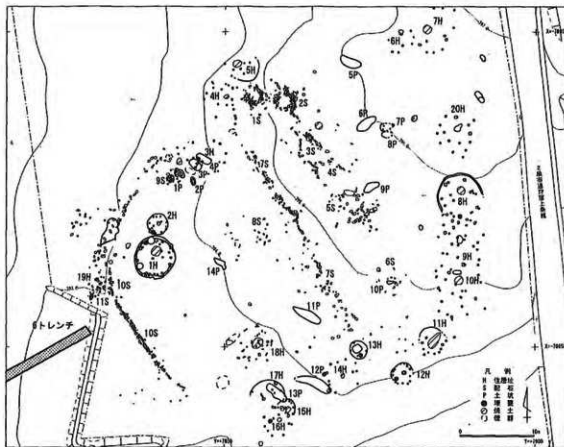
第II次調査では、第I次調査の成果を受け、調査区を丘陵部平坦面全体に広げて調査している。丘陵部平坦面の南側から、第I次調査区の周辺を調査し、帯状配石遺構の一部、住居跡を18基余り、土坑を10基確認している。住居跡に伴う埋甕や炉跡、焼土跡も確認している。

調査の結果、住居跡が構築された層と配石遺構の構築された層には違いがみられ、住居跡が構築された後、配石遺構が構築されたとされ、時期差が想定されている。

出土した遺物は、曾利式後半の土器、石器(石鎌・石匙・打製石斧・磨製石斧・石錐・磨石・凹石・石皿)、土製品(土器片円盤・土器片錘・土偶)、石製品(石棒)である。土器をみるとほとんどが曾利IV式からV式段階のものである。遺物の出土は、配石遺構出土のものは少なく、住居出土が多いようである。なお、現在大石寺が保管する土器を、本報告書で再録した(第V章)。



第7図 調査区周辺地形図



第8図 第I・II次調査遺構分布図

### 第三章 遺構

#### 第1節 各トレンチの様相

##### 第1項 1トレンチ(第9図、写真図版2-1)

1トレンチは、史跡指定範囲の北東方向に20mほど離れた丘陵の緩斜面上に設定したトレンチで、標高は401m付近に位置する。

掘り下げは史跡指定範囲内において竪穴住居跡などの遺構確認面とされた暗褐色土層(栗色土層)までを目指して行った。史跡指定範囲内の調査においては、黒ボク土層と栗色土層の間に、「スコリア質のやや大きいラビリーを多量に含む赤っぽい褐色土層」が確認され、竪穴住居跡はこの褐色土層の「厚い堆積を受けており、またこの層がある程度堆積した頃、配石遺構の多くが造成されたものと思う。」と報告されている(加藤学園考古学研究所1975)。この1トレンチでは、表土・明赤褐色土・黒色土・暗褐色土・黒褐色土・褐色土・褐色土・橙色土が確認されたが、これらはそれぞれ、標準土層に対比させると、表土・大沢スコリア層・黒ボク土層・栗色土層上層・栗色土層下層・富士黒土層相当層・ローム層に該当すると考えられる。前述の褐色土層と遺構確認面とされた暗褐色土層は、今回の調査では土の特徴から、それぞれ栗色土層上層とした暗褐色土、栗色土層下層とした黒褐色土に相当すると考えられる。

しかし、栗色土層上層での遺構・遺物の発見されなかったため、さらに掘り下げを行い、栗色土層下層まで掘り下げを行った。栗色土層下層では、スコリアの混入が多い部分が平面的に確認され、遺構の可能性もあるため調査したが、底面の凹凸が著しいものも多く、地形的な落ち込みや木根などによる影響と判断した。第 図に示す平面図攪乱部分がそれにあたる。

なお、遺構・遺物の確認はされなかったため、一部をローム層まで掘り下げ、下層の堆積状況の確認を行っている。

##### 第2項 2トレンチ(第10図、写真図版2-2)

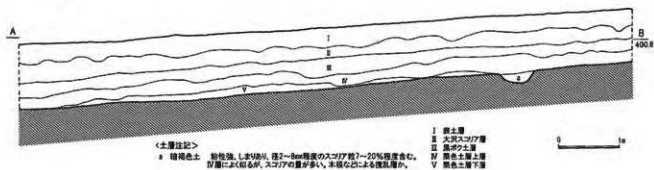
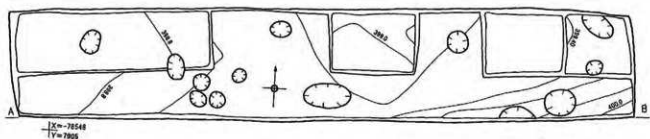
2トレンチは、1トレンチの東側8mほどの場所に設定したトレンチである。標高は402m付近に位置する。この辺りから傾斜がやや急となる傾斜変換点に位置する。

土の堆積状況は、1トレンチと同じような状況であり、標準土層の表土から栗色土層下層までの堆積を確認した。

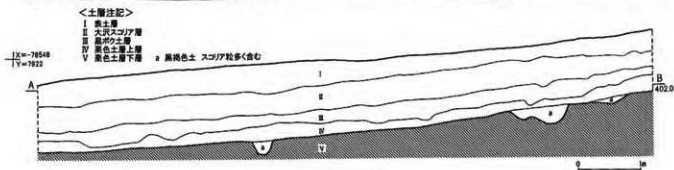
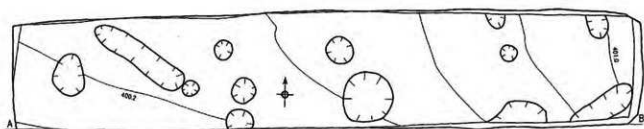
調査は、1トレンチと同様な方法で行うこととし、栗色土層下層まで掘り下げたところ、1トレンチと同様に、栗色土層下層の平面上にスコリアを多く含む黒褐色土が部分的に確認された。調査したところ、平面形が不整形となり、底面も地形の傾斜に沿うような形で凹凸が見られた。この落ち込みでは遺物の確認もされなかったため、遺構ではなく、地形的な落ち込みや木根などの攪乱と判断し、平面図に示す攪乱部分として図示している。



X=7848  
Y=7914



第9図 1トレンチ実測図



第10図 2トレンチ実測図

### 第3項 3トレンチ(第11・12図、写真図版3-1)

3トレンチは、2トレンチの東側7mほどの場所に設定したトレンチである。標高は404m付近に位置する。傾斜は2トレンチよりさらに急となっている。

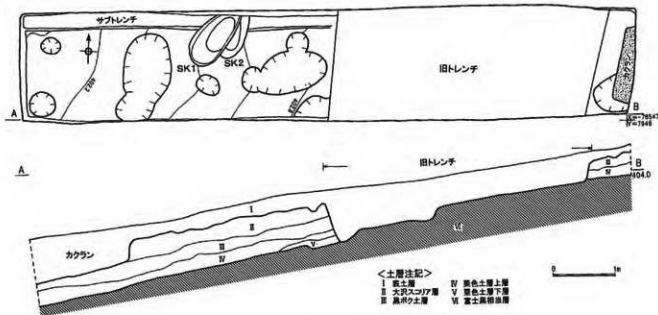
3トレンチ東側には、1～3トレンチの緩斜面の頂部にあたる丘陵の平坦面が広がっており、縄文土器を採集したという話も聞く。そのためか、第Ⅲ次調査では、千居の集落に対する墓地の確認を目的に、この丘陵を囲む位置に5つのトレンチを設定し、墓壇群を発見したと報告されている(小野1982)。発見された土壇は、長さ1.2m前後、幅0.7m前後の平面楕円形を呈し、深さ20～30cmであるもの総数57基と報告されており、第Ⅲ次調査と重複する場所に設定した3トレンチでは、これらの発掘状況及びその広がりを確認することを目的とした。

なお、この平坦面は、かつて「千居A遺跡」として命名されており、史跡指定範囲を含む平坦面が「千居B遺跡」とされて区別されていた。現在は統合されて、「千居遺跡」としている(富士宮市教育委員会2000)。

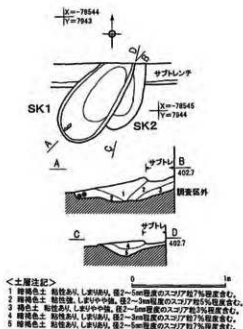
第Ⅲ次調査区との重複は、旧トレンチは、3トレンチ東側部分において確認され、調査範囲にビニールシートが敷かれていたため容易に確認することができた。表面には、落ち込みも残存しており、土壇とされた箇所ではないかと思われた。本発掘調査では、旧トレンチの状況を見て掘り下げは、第Ⅲ次調査時と同じ程度かやや下部まで行った。

3トレンチでは、丘陵の頂部に近いこともあって、緩斜面の上部と下部で堆積土の厚さに差があった。東側では攪乱が及んでいることもあってか、大沢スコリア層は見られなかったが、1・2トレンチと同様に標準土層の堆積が確認されたため、本来的には安定した土の堆積状況にあると考えられた。

X=78544  
Y=7948



第11図 3トレンチ実測図



第12図 SK1・SK2実測図

SK1はSK2を切っている。SK1より土器が出土した(第24図2・3)。SK1・SK2はいずれも調査区外へ広がっているため全容は不明だが、規模は、SK1が長軸0.99m、短軸0.52m、深さ24cm、SK2が長軸0.77m、短軸0.24m、深さ16cmの平面楕円形を呈する。底面はいずれも凹凸があり、断面形もいびつである。

以上の調査結果より、今回調査範囲で確認されたSK1・SK2を含む落ち込みは、いずれも遺構というより、1・2トレンチで確認されたような地形的な落ち込みや木根などによる攪乱と判断し、平面図にはそのように図示した。

#### 第4項 4トレンチ(第13図、写真図版3-2)

4トレンチは、2トレンチから南へ22mほどの緩斜面上に位置する。標高401m付近である。傾斜は南へ行くほど急となっている。

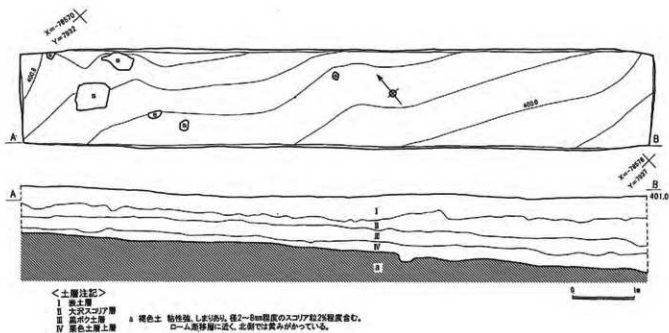
土層は、表土から栗色土層上層までの堆積が見られたが、栗色土層下層を欠き、ローム漸移層のような褐色土が見られるなど、斜面地の堆積状況である。また、他のトレンチでは確認されなかった溶岩礫も露呈している。

4トレンチにおいても、1～3トレンチと同様に、栗色土層上での遺構・遺物の検出に努めた。しかし、斜面地の影響を受け、下層のローム漸移層との混在が著しかったため、ローム漸移層まで掘り下げを行うこととし、ローム漸移層上での遺構確認を行うこととした。

ローム漸移層では、1～3トレンチと同様に、やや色調の黒みがある箇所が部分的に確認された。それらの調査を行ったところ、1～3トレンチと同様に、平面形は不整形で、深さは浅く、底面も凹凸があり地形の傾斜に沿うような形で確認された。そのため、地形的な落ち込みや木根による攪乱と判断した。遺物の出土も全く見られなかった。

3トレンチ南壁付近の旧トレンチ重複部分では、第3次調査で確認された土壌と思われる落ち込みが今回調査区にまたがって確認された。そのため、土層セクションを観察したところ、遺構確認面となる富士黒土層相当層よりやや黒味がかかり、スコアの混入も少ない傾向が見られるなどの違いは見る事ができた。しかし、今回調査区内で掘り下げを行ったところ、平面形は不整形となり、また深さが10cm程度と浅く、底面も凹凸が確認された。このような落ち込みはほかにも確認されたため、調査を行ったところ、いずれも底面に凹凸が見られたり、また浅く、地形に沿って傾斜するなどした。また、遺物の出土も次に示すSK1内に確認できたのみで、土坑やピットとするには疑問が感じられた。うち、第12図に示すSK1とSK2としたものは、ある程度の深さがあったため図示したが、遺構としての認定は難しいものである。SK1がSK2を切っている。

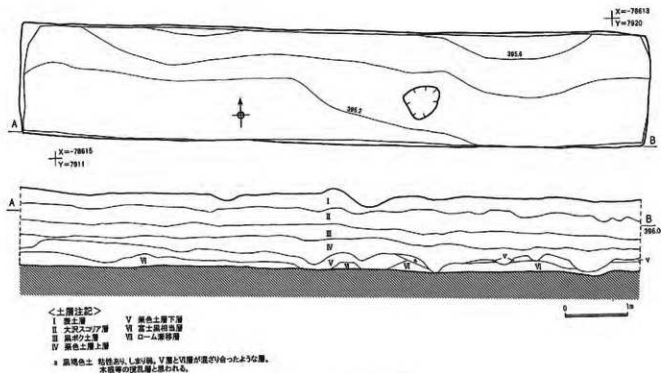
SK1より土器が出土した(第24図2・3)。SK1・SK



第13図 4トレンチ実測図

第5項 5トレンチ(第14図、写真図版4-1)

5トレンチは、1トレンチから南へ65mほどの緩斜面上に位置する。標高396m付近である。史跡指定範囲の東側10mほどにあたり、整穴住居跡や配石遺構が展開する平坦面と丘陵部との傾斜変換点にあたる。



第14図 5トレンチ実測図

土層は、大沢スコリア層からローム層までの標準土層を示し、1・2トレンチに様相がよく似ていた。

調査は、1～4トレンチと同様に、栗色土層下層面での遺構・遺物の検出に努めることとした。栗色土層下層面では、1・2トレンチで見られたようなスコリアを多く含む部分が平面上で多く確認され、調査したところ、平面形が不整形で底面も凹凸が見られるなど、1～4トレンチで確認された落ち込みと同じ様相であった。そのため、遺構ではなく、地形的な落ち込みや木根などによる攪乱と判断した。

5トレンチは史跡指定範囲に近接しているため、さらにローム層までの掘り下げを行い遺構の確認に努めたが、確認されなかった。栗色土層中より遺物はわずかに土器が出土した(第24図4・5)。

#### 第6項 6トレンチ(第15～18図、写真図版4-2～5-2)

6トレンチは、史跡指定範囲のすぐ西側に設定したトレンチで、南東方向に向かう緩斜面上に位置する。標高は393～391m付近である。

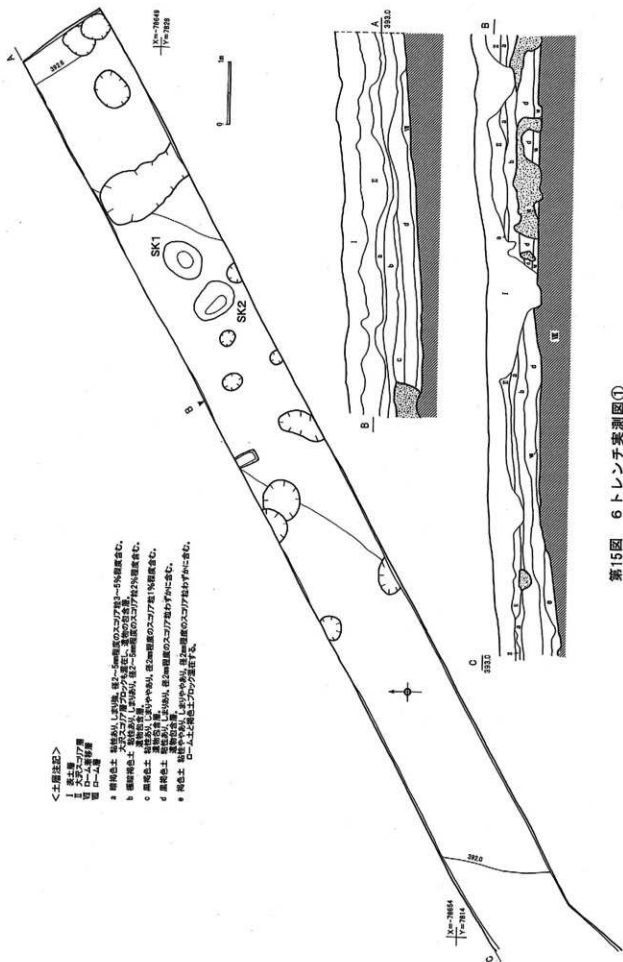
この6トレンチは、史跡指定範囲に最も近く、第Ⅰ・Ⅱ次調査で確認された配石遺構や竪穴住居跡の広がりを確認するために設定したトレンチである。そのため掘り下げは、遺構確認面である栗色土層まで行うこととしたが、大沢スコリア層を除去後には黒ボク土層は確認されず、栗色土層でもない暗褐色土層(a層)が検出された。その下部においても、ローム漸移層、ローム層に至るまで標準土層とはならず、極暗褐色土～黒褐色土(b～d層)の堆積が見られ、史跡指定範囲内との差異が見られた。a～d層は、遺物を包含していた。遺物は、トレンチの全体から出土しているが、トレンチ上部では分布が疎となっている。平面的には散漫な分布状況である。トレンチ内では、中央付近より地形の傾斜が南よりに変換しており、この変換付近から遺物の分布が密となるようで、遺物出土状況はこの傾斜変換に沿っている。また、一部現代の木根などによる攪乱の影響もあって、出土が疎となっているような箇所も見られる。出土層位を見ると、大沢スコリア層の下部であるa層からローム漸移層にわたって混在する出土状況である。出土遺物は、第 図に示したが、出土土器からは層位的な時期差などは見られなかった。また、各層位の遺物出土状況には目立った差が見られない。そのため、これらの遺物の出土状況は、土の移動に伴う流れ込みの堆積状況と判断した。

6トレンチにおいても、1～5トレンチと同様に、平面的に不整形で、底面も凹凸のある落ち込みが多数確認されたが、あきらかに木根による攪乱であるものも含め、攪乱として図示している。わずかに、平面形が楕円形で、底面が船底状を呈するものをSK1・SK2として図示したが、覆土からは遺物は出土しなかった。

SK1は、長軸0.67m、短軸0.53m、深さ15cmの規模であり、SK2は、長軸0.7m、短軸0.51m、深さ15cmの規模である。ほぼ同規模である。他の落ち込みとした攪乱の覆土にくらべて黒みが強く、しまりも強かった。遺物の出土もなく、展開も不明であるため、遺構の性格は不明である。

6トレンチでは、史跡指定範囲の遺構分布状況に関連する遺構の分布は確認されず、また、礫も全くと言っていいほど見られなかった。トレンチの上部、史跡指定範囲に近い場所から史跡指定範囲を見ると、連続した平坦面上に位置するように見受けられた。

出土遺物も流れ込みに伴うものと判断され、6トレンチは史跡指定範囲の遺構分布の限界を示すと考えられる。

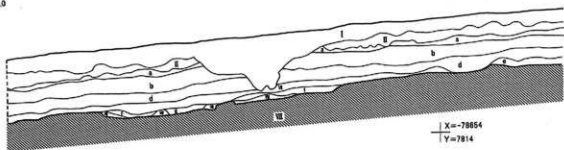


<土層状況>

- 1 大穴スッパノリ層
- 2 大穴スッパノリ層
- ローム層

- a 暗褐色土 粘粉あり、しまり強、厚2~5mm程度のスッパノリ層3~5%程度を含む、大穴スッパノリ層アツクも存在し、遺物の存在も。
- b 暗褐色土 粘粉あり、しまり強、厚2~5mm程度のスッパノリ層2%程度を含む、遺物の存在も。
- c 暗褐色土 粘粉あり、しまり強、厚2mm程度のスッパノリ層1%程度を含む、遺物の存在も。
- d 黒褐色土 粘粉あり、しまり強、厚2mm程度のスッパノリ層わずかに含む、遺物の存在も。
- e 褐色土 粘粉あり、厚2mm程度のスッパノリ層わずかに含む、ロームと土質褐色土アツクも存在する。

第15図 6トレンチ実測図①

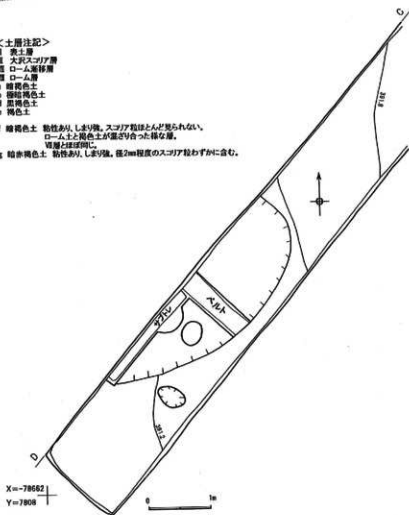


X=78854  
Y=7814

<土層注記>

- i 表土層
- e 大孔スツア層
- f ローム腐葉層
- o ローム層
- g 暗褐色土
- b 暗赤褐色土
- d 黒褐色土
- o 褐色土

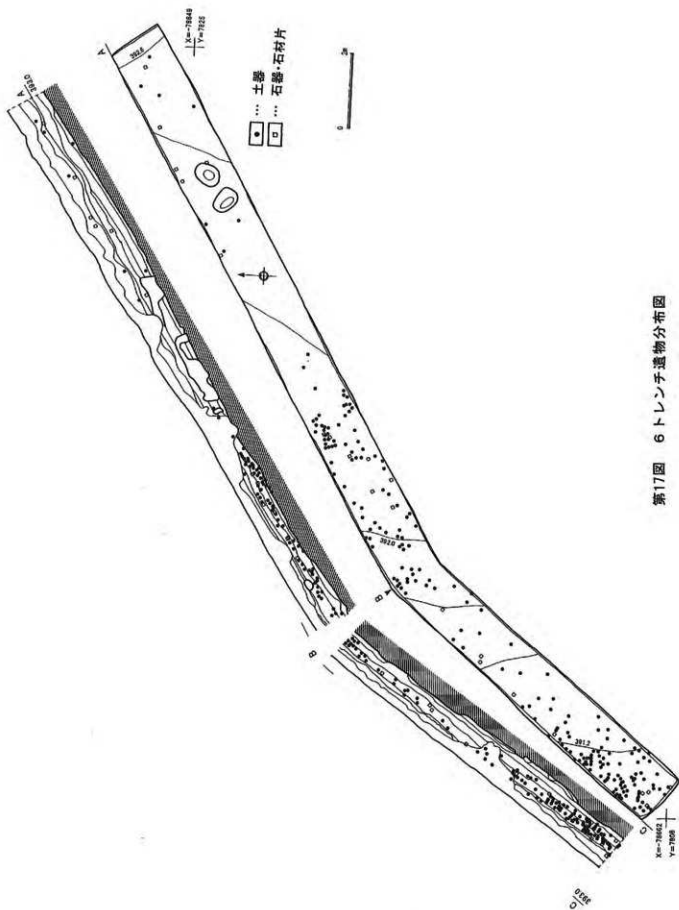
f 暗褐色土 動物あり、しりじり強、スツア粒ほとんど見られない、  
o-ム土と褐色土が混ざり合った様な層、  
腐葉とほぼ同じ。  
g 暗赤褐色土 動物あり、しりじり強、僅2mm程度のスツア粒わずかに含む。



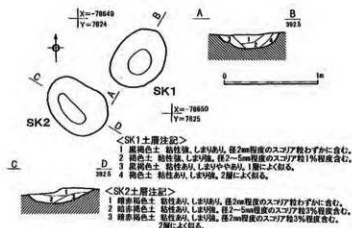
X=78862  
Y=7808

第16図 6トレンチ実測図②

第17図 6 トレンチ手遺物分布図







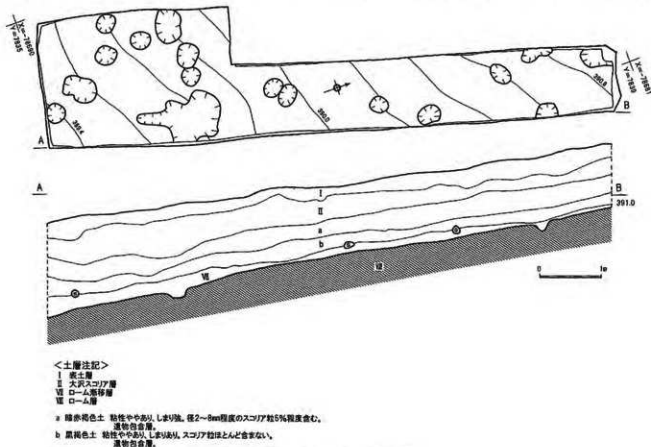
第18図 6トレンチSK1・SK2実測図

第7項 7トレンチ(第19・20図、写真図版6)

7トレンチは、史跡指定範囲のすぐ南側に設定したトレンチで、東に小さな谷地形、西に史跡指定範囲から連続する南東方向の傾斜地との間に位置する。標高は391m付近である。

6トレンチと同様に、遺構分布の南側への広がりを確認するために設定したトレンチである。そのため、掘り下げは、6トレンチと同様に栗色土層まで行うこととしたが、7トレンチにおいても、6トレンチと同様の様相であった。

土の堆積状況は、大沢スコリア層とローム漸移層、ローム層は確認されたが、黒ボク土層・栗色土層等の安定した堆積は見られなかった。大沢スコリア層とローム漸移層の間には、暗褐色土層(a層)、



第19図 7トレンチ実測図

黒褐色土層(b層)の堆積が見られた。これは、6トレンチのa層～d層に相当し、7トレンチからも遺物が出土している。

遺物の出土状況も6トレンチと同様で、平面的には散漫な分布状況であり、断面的にもa・b層の2層にわたる出土状況である。地形的に見ても、7トレンチの出土遺物は流れ込みに伴うものと判断される。

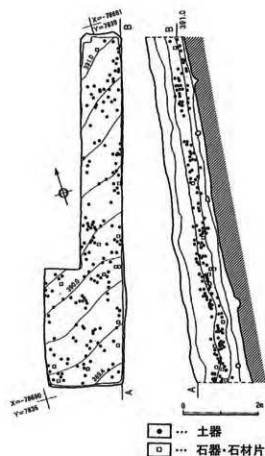
また、1～6トレンチと同様に、平面形が不整形で、底面に凹凸がある落ち込みが多数確認されている。6トレンチと同じく、明らかに木根の攪乱と判断されるものもあり、攪乱として図示している。

7トレンチでは史跡指定範囲の遺構分布状況に関連する遺構の分布は確認されず、遺物も流れ込みに伴うものであると考えられる。

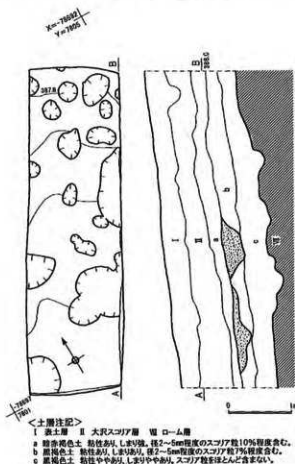
#### 第8項 8トレンチ(第21図、写真図版7-1)

8トレンチは、6トレンチと7トレンチの間の緩斜面上を、史跡指定範囲から33mほど南西に下った場所に設定したトレンチで、標高389m付近に位置する。

土の堆積状況は、6・7トレンチとほぼ同じ様相であり、大沢スコリア層とローム層の標準土層は確認されたものの、その間の黒ボク土層や栗色土層等を欠いている。また、表土からローム層までの土の堆積が最も厚く、大沢スコリア層の堆積も最も厚くなっている。大沢スコリア層とローム層の間には、暗褐色土層(a層)、黒褐色土層(b・c層)が確認されたが、木根による攪乱も見られたり、それぞれの層の境は明瞭ではなかった。これは、8トレンチの場所が、地形的に傾斜が緩やかとなる傾



第20図 7トレンチ遺物分布図



第21図 8トレンチ実測図



第10項 10トレンチ(第23図、写真図版8-1)

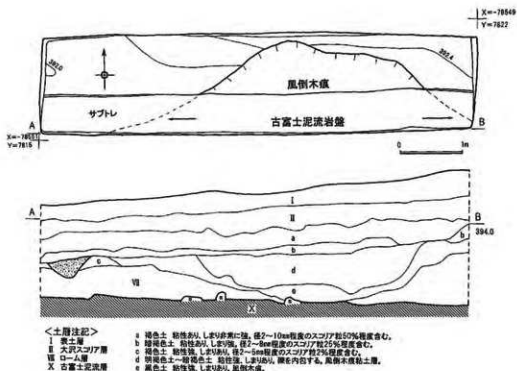
10トレンチは、史跡範囲の北辺から北に15mほどの緩斜面上に設定したトレンチで、標高395m付近に位置する。

10トレンチは、史跡指定範囲のある平坦面北側の小さな谷を挟んだ緩斜面上にある。地形をみると、1～3トレンチと連続する丘陵にあるようである。

土の堆積状況は、史跡範囲の西側に設定した6～9トレンチと同様な様相で、大沢スコリア層とローム層は確認されたものの、その間の黒ボク土層や栗色土層等を欠いていた。大沢スコリア層とローム層の間には、褐色土(a・c層)、暗褐色土(b層)が見られた。a層は、大沢スコリア層と褐色土の混在する層で、b層は黒ボク土層～栗色土層相当層、c層はローム漸移層相当層と考えられた。

b層とc層の間には、風倒木痕が確認された。風倒木痕の完掘後、下層の調査を行うためにさらに掘り下げたところ、9トレンチと同様に古富士泥流の岩盤層が確認された。10トレンチでは9トレンチで確認されたような古富士泥流起源の礫が浮上している様子はなく、やや安定した基盤にあるようである。

しかしながら、遺構・遺物の確認はなく、遺跡の広がり確認されなかった。



第23図 10トレンチ実測図

## 第四章 出土遺物

### 第1節 土器

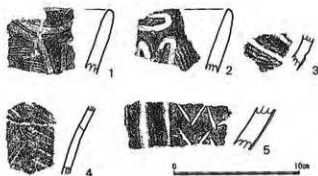
本調査区の1～10トレンチのうち、遺物の出土が確認されたのは3・5～8トレンチである。遺物総数454点、うち土器415点、石器及び石材片39点で、その割合は土器が91.4%、石器及び石材片8.6%と圧倒的に土器出土数が多くなっている。掲載した資料は、大きさが2cm四方程度以下のものや、状態がよくなく文様などの観察が難しいもの以外の全ての土器である。総点数261点である。

出土土器は、縄文時代中期後半の曾利式土器の後半段階のものがほとんどであり、加曾利E式土器もわずかに含まれる。器種は破片資料のため判別しにくいいため、器種がわかるもの以外はほとんどのものを深鉢形土器としている。トレンチごとに出土遺物を記述し、分類は、以下のとおりである。

#### 第I群 曾利式土器

- 1類 地文が条線の土器(曾利Ⅲ～Ⅳ式段階)
- 2類 地文が歯状刺突文の土器(曾利Ⅳ式段階)
- 3類 地文が連続する「ハ」の字状の沈線あるいは短沈線の土器(曾利Ⅴ式段階)
- 4類 地文が縄文の土器
- 5類 上記分類外の曾利式土器

#### 第II群 加曾利E式土器



第24図 3・5トレンチ出土土器

加曾利E式土器かと思われる。1は口縁部文様の簡素化が著しい曾利Ⅴ式段階の土器と思われる。2・3はSK1出土遺物である。

#### 第2項 5トレンチ出土土器(第24図4・5、第3表)

いずれも深鉢形土器と思われ、地文には連続する「ハ」の字状の沈線が見られ、第I群3類の土器である。5は、縦位の隆帯とその脇に沈線が見られるもので、いずれも連続する「ハ」の字状の沈線を器面に展開する曾利Ⅴ式段階のものと思われる。

第1項 3トレンチ出土土器(第24図1～3、第3表)  
すべて深鉢形土器と思われる。地文は縄文で、1は、口縁部に弧線文と弧線文から連続する縦位の沈線が見られる。第I群曾利式土器4類である。2は、口縁部に楕円区画文とみられる沈線があり、その下に蕨手状になるかと思われる縦位の沈線が見られる。第II群加曾利E式土器である。3は、胴部を斜行する隆帯が見られるもので、隆帯の脇には沈線が施されている。

(1) 第I群 曾利式土器(6~113、128~133、243・244・246・249・252~255)

A. 1類 地文が条線の土器

6~8は、地文が条線となるもので、曾利IV式段階と思われる。深鉢形土器の口縁部である。6・7は横位の沈線が巡っている。小片のため、条線の方向などわかりにくい、6は横位、7・8は斜位で7は綾杉状条線となっている。

33~35は、縦位の条線が見られるもので、小片のためわかりづらいが、頸部から胴部にかけてのもと考えられる。いずれも深鉢形土器と思われる。33は縦位の隆帯が貼付されているもので、隆帯には押圧が加えられている。いずれも条線がみられるので、曾利III~IV式段階かと思われる。

46~63は、条線が見られるもので、すべて深鉢形土器であり、曾利IV式段階のものと思われる。46~50は頸部~胴部にかけての破片、51~63は胴部の破片である。46・47・52~54・59は縦位の隆帯が見られ、51は渦巻状となる隆帯が見られる。52は横位の隆帯が見られるもので、沈線による蛇行懸垂文らしき沈線も観察できる。条線の方向は、綾杉状となるもの47~52、57~59、62、綾杉状かと思われるもの46・53、横位であるもの54~56、縦位であるもの58・60・61・63である。

243・244は、縦位の条線が見られるもので、243・244共に深鉢形土器の口縁部である。いずれも縦位の隆帯が見られ、隆帯上には両側から指でつまんで凹圧を加えたようになっている。

B. 2類 地文が櫛歯状刺突文の土器

64~69は櫛歯状刺突文が見られるもので、曾利IV式段階のものと思われる。全て深鉢形土器と思われ、胴部及び胴部~底部にかけてのものである。64は、縦位の隆帯と沈線による懸垂文が見られるもので、文様が比較的深くくっきりとしている。68は、縦位の沈線が見られるもので、やや小型の土器になると思われる。65~67、69は胴部に櫛歯状刺突文が展開するもので、矢羽根状になる66~69、ランダムになる65がある。

C. 3類 地文が連続する「ハ」の字状の沈線あるいは短沈線の土器

この連続する「ハ」の字状の沈線が見られる土器が、後述する7トレンチでも出土数が多く、千居遺跡の主体となる時期のものと考えられる。

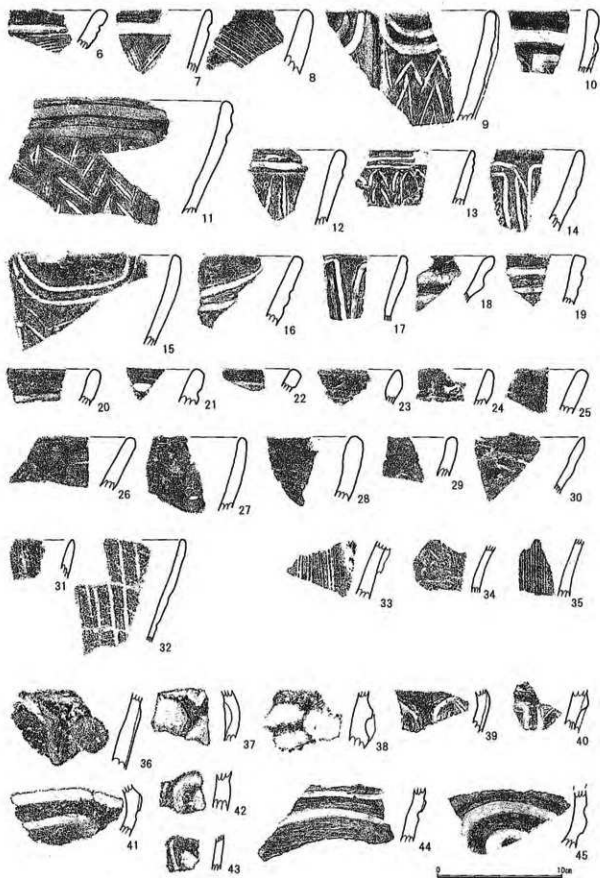
9~15は深鉢形土器の口縁部で、9・10には隆帯による区画がなされている。9はさらに、口縁部に沈線で弧線文が見られる。11~14は、横位の沈線および「区画」となる沈線が見られるもので、15は弧線文となっている。

246は、深鉢形土器の口縁部~胴部である。口縁部には2重の弧線文、その下に、やや上部が弧線文のように弧を描く「区画」が見られる。

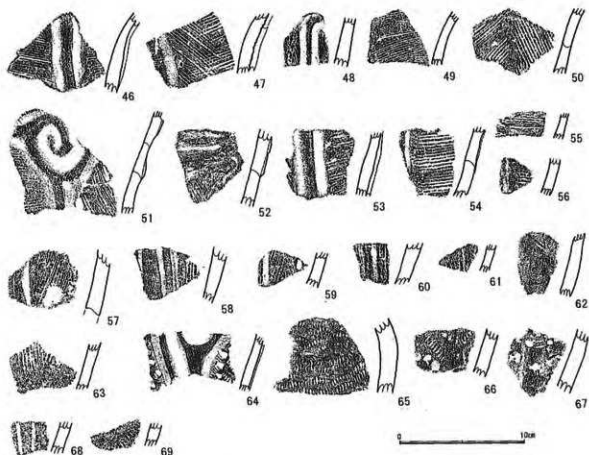
38~40には、連続する「ハ」の字状の沈線が見られ、隆帯の見られる深鉢形土器の頸部~胴部にかけての破片で、隆帯によって区画を作り出している。区画は、いずれも「区画」になると思われるが、38は隆帯の割れもあって構成がよくわからない。

70~112は、連続する「ハ」の字状の沈線が器面に見られるもので、曾利V式段階のものである。頸部~胴部にかけての70~76、胴部の77~104、胴部~底部にかけての105~112に分けられる。深鉢形土器がほとんどと思われるが、84のように把手がつくようやや胴部が丸く、壺形土器になる可能性のあるものや、78~81のように器壁が厚く、文様展開も大きくやや大型になる可能性のある土器、やや小型の土器になる可能性のある112も見られる。

70・71・78・79・81~83・88・89・105は、隆帯が見られるものである。縦位の隆帯は、70・71・



第25図 6トレンチ出土土器実測図①



第26図 6トレンチ出土土器実測図②

82・83・88・89・105であり、渦巻状となるものは、79～81、横位の隆帯は78である。沈線の見られるものは、72・74・76・77・84・86・90～97・106・110・112である。すべて区画文になると思われる。横位の沈線は72、縦位の沈線は74・76・90～97・106・110・112、 $\square$ 区画となり口縁部が内湾すると考えられる77、84・86は、楕円形または $\square$ 形の区画文になる可能性がある。また、97には、沈線による蛇行懸垂文かと思われる波状の沈線がある。

256は、深鉢形土器の底部である。縦位の沈線が見られる。胴部のふくらみが弱い器形となるようである。

#### D. 4類 地文が縄文の土器

113は、隆帯上に縄文の見られるもので、隆帯は渦巻状となると思われる。やや大形の土器になると思われる。

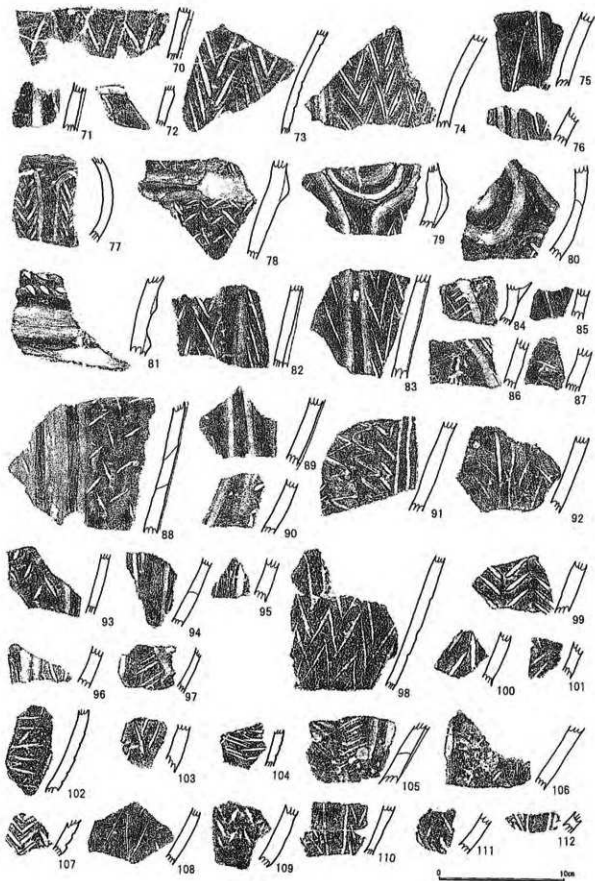
#### E. 5類 上記分類外の曾利式土器

16～24は、口縁部に沈線の見られるもので、16は弧線文、17は $\square$ 区画になるかと思われる。18～24は横位の沈線がみられる。21は波状口縁になる可能性がある。いずれも口縁部文様の簡素化が進む曾利IV・V式にかけての段階のものと思われる。

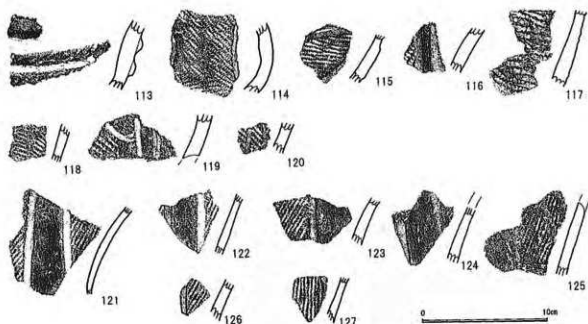
25～30は、口縁部が無文となるものである。26・30は外反する口縁部、27～29は内湾する口縁部である。時期は、その他の土器と同じく曾利IV・V式段階のものと思われる。

31・32は同一個体と思われ、胴部破片128～131も接合はしなかったが同一個体と思われる。口縁部から胴部にかけて縦位の沈線のみ見られるものである。





第27図 6トレンチ出土土器実測図③



第28図 6トレンチ出土土器実測図④

36・37は、隆帯の見られる深鉢形土器の頸部～胴部にかけての破片で、隆帯によって区画を作り出している。区画は、いずれも門区画になると思われるが、38は隆帯の剥がれもあって構成がよくわからない。36・37はほかに文様が見られないため、時期は区画文が見られるようになる曾利Ⅲ式～Ⅴ式にかけてのものと考えられる。

41～45は、隆帯と沈線による文様が見られるものである。41は横位の隆帯と沈線が見られるもので、断面がく字状に曲がっている。

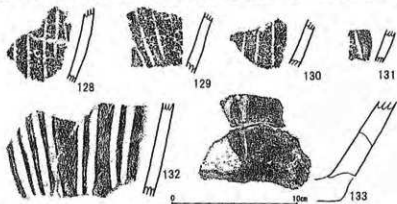
42・43は、沈線によって文様が作られるものであるが、小片のため文様展開は不明である。44・45は、やや大型の土器となる可能性があり、隆帯で渦巻文を作り出している。いずれも小片のため時期は不明である。

128～132は、縦位の沈線のみ見られる胴部の破片である。128～131は、前述の31・32と同一個体と思われるもので、胎土は粗く、表面が非常に脆弱化している。よく使い込まれているように見受けられる。132は、施された沈線を見ると、2本単位の沈線であるようである。胎土は他に比べ密で、表面も滑らかで異質な印象を受ける。31・32、128～132はいずれも、沈線のみ見られるもので、132は

他の曾利式土器とは胎土も異なり、曾利式土器ではない可能性がある(注1)。

133は、底部で、縦位の沈線が見られる。沈線による区画が見られるようになる曾利式Ⅳ・Ⅴ式段階と思われる。

249は、口縁部が無文である深鉢形で、ハガレがあって展開は不明だが、隆帯が見られる。



第29図 6トレンチ出土土器実測図⑤

253・254は底部である。253は無文であり、254には縦位の沈線が見られる。

255は、把手部分である。深鉢形土器の把手と思われる。

注1 池谷氏教示。

## (2) 第Ⅱ群 加曾利E式土器(121~127)

114~127は、縄文が見られるもので、114~116、121~125は口縁部~頸部、117~120、126・127は胴部の破片である。いずれも深鉢形土器と思われる。

114~120は、縄文と隆帯、沈線で構成される文様が見られる。隆帯の見られるものは116のみで、それ以外は沈線が見られる。縦位の沈線が見られるものは、114・116・119・120であるが、114は強く内湾する器形にやや曲線状の沈線となる可能性がある。横位の沈線が見られるものは115で、119は縦位の沈線に加えて弧状の沈線が見られる。117は、縄文を粗く施文している。118は施文単位の狭い縄文が見られる。121~127はいずれも器壁が薄く、また縄文の施文も密で、比較的丁寧になされているように見受けられる。121~125は、縦位の沈線と磨り消し縄文が見られるもので、縦位の無文帯も見られる。123と127は同一個体、124と125は同一個体と考えられる。

## 第4項 7トレンチ出土土器(第30~33、35図134~227、237~242・245・247・248・250・251・256・277、第3表・写真図版8-2、9)

### (1) 第Ⅰ群 曾利式土器(134~227、237~241・245・247・248・250・256・257)

#### A. 1類 地文が条線の土器

134・135・145は、地文が条線となるものである。深鉢形土器の口縁部である。134は、隆帯によって「区画」を作り出しているもので、横位の条線を区画内に充填している。135は、内側にやや肥大する口縁部となっており、縦位の深くはっきりとした条線が見られる。134は曾利Ⅲ~Ⅳ式段階、135は曾利Ⅰ~Ⅳ式段階と思われる。145は、蕨手状あるいは「字」状や「区画」になるかと思われる沈線が見られる。曾利Ⅳ~Ⅴ式段階のものと思われる。

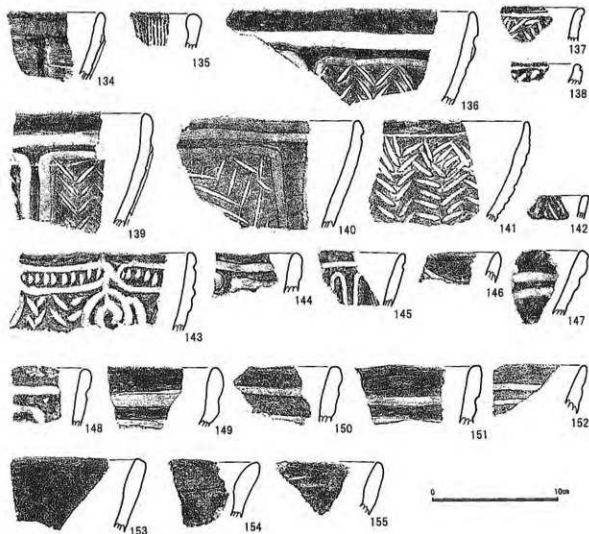
162~185は、条線が見られるものである。いずれも深鉢形土器と思われる。162~173は、頸部~胴部にかけてのもので、174~185は胴部のものである。

162~164は、縦位の条線が見られるもので、162・163は縦位の隆帯が貼付されている。隆帯には押圧が加えられている曾利Ⅰ~Ⅳ式段階と思われる。165~170・175~178・183は縦位の隆帯が見られるもので、165・166は、「区画」になっている。168は、楕円文になるかと思われる沈線も見られる。沈線が見られるものは、171~174・178~182・184で、うち180~182は、沈線による蛇行懸垂文が見られる。条線の方向は、綾形または斜方向となる165~175・180~185、横位となる176~179がある。

245は、壺形土器の頸部から胴部にかけてのものである。隆帯による渦巻文が見られる。胴部には把手が付けられている。

#### B. 2類 地文が櫛歯状刺突文の土器

186~196は、櫛歯状刺突文の見られる頸部~胴部の破片である。いずれも深鉢形土器と思われる。櫛歯状刺突文が見られるため、曾利Ⅴ式段階のものと思われる。隆帯の見られるものは、187・190で、縦位の沈線が見られるものは188・189・191・192・195である。187は、器形が大きく内湾しており、櫛歯状刺突文もやや単位が長くなっている。櫛歯状刺突文の方向は、観察される範囲では、矢羽根状に展開する187~190、193・195、ランダムに展開する194がある。



第30図 7トレンチ出土土器実測図①

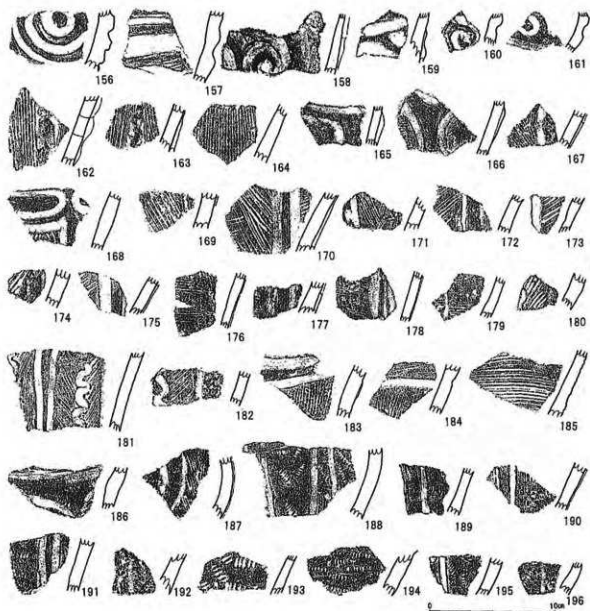
### C. 3類 地文が連続する「ハ」の字状の沈線あるいは短沈線の土器

本群土器は、他の群に比べて最も多く、この様相は6トレンチと同じである。136～143は、地文が連続する「ハ」の字状の沈線となるもので、深鉢形土器の口縁部である。曾利V式段階のものと思われる。136・139は隆帯によって「ハ」区画を作り出している。137・138・141は横位の沈線が見られ、140は沈線による「ハ」区画が見られる。142は、口縁端部から連続する「ハ」の字状の沈線が見られるものである。143は、横位の楕円文の中に刻み目を入れた区画文と、そのつなぎ目から沈線による渦巻文が見られるもので、このような文様展開が見られるものは143のみである。

197・198・247は、縦位の沈線と短い沈線が縦位に見られるものである。同一個体かと思われる、深鉢形土器である。この短い沈線は、連続する「ハ」の字状の沈線に似ているが、「ハ」の字状とはなっていない。247を見ると、口縁部には横位の沈線の下に横位の楕円文、縦位の蕨手状沈線が見られる。時期は、連続する「ハ」の字状の沈線が見られる土器と同じ曾利V式段階と思われる。

199～227は、連続する「ハ」の字状の沈線が見られる土器で、いずれも深鉢形土器の胴部あるいは胴部～底部にかけての破片である。縦位の隆帯の見られるものは、199・200、213～219で、縦位の沈線が見られるものは201～204、207・212・221～223、225・226である。

205・206・221のように連続する「ハ」の字状の沈線が密に施されているものと、208・224のよう



第31図 7トレンチ出土土器実測図②

に破らなものがあ

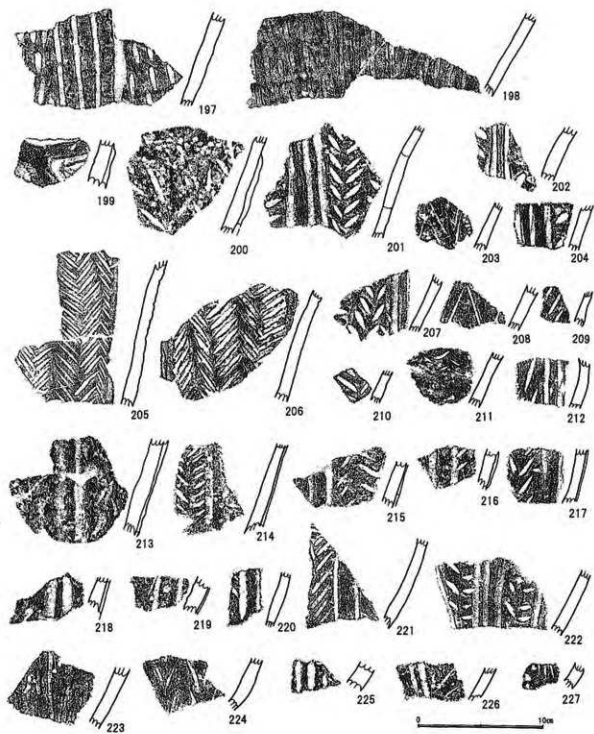
D. 5類 上記分類外の曾利式土器

144・146～152は、沈線が見られるもので、144・145・147～152は横位の沈線、146は弧線文となっている。いずれも深鉢形土器の口縁部である。うち、144・148は「区画」になるかと思われる。また、144には円形の刺突が見られる。

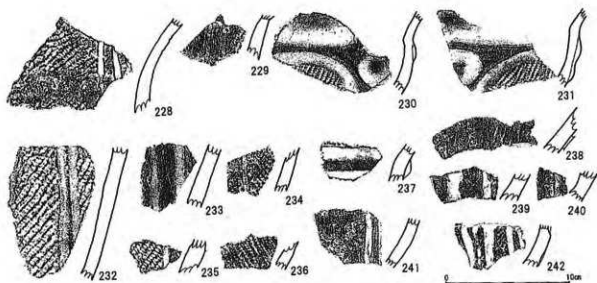
153～155は無文となる口縁部だが、口縁部内側をやや肥厚させている。

156～161は、隆帯または沈線による渦巻文が見られるものである。いずれも深鉢形土器と思われる。157～169は隆帯で、156・160・161は沈線による。157は比較的大きな渦巻文になるとと思われる。156～161は小片のため文様展開は不明であるが、曾利Ⅲ～Ⅳ式段階と思われる。

237は、横位の隆帯が見られる土器である。深鉢形土器の頸部と思われる。241・240は、深鉢形土器の胴部から底部にかけての破片で、縦位の隆帯が見られる238、縦位の沈線が見られる238～241がある。



第32図 7 トレンチ出土土器実測図③



第33図 7トレンチ出土土器実測図④

248は、深鉢形土器の口縁部～頸部にかけてのもので、把手が付いている。把手部分は、渦巻文の一部になっている。

250は、縦位の沈線が見られる深鉢形土器の底部である。底部から胴部にかけて大きく膨らむ器形のようにある。

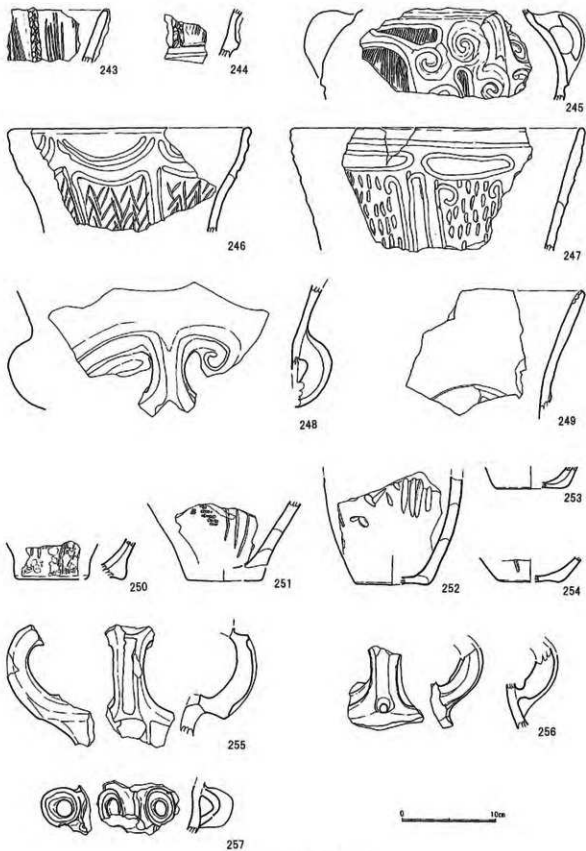
256・257は、把手部分である。深鉢形土器のものと思われる。256は、把手の下部には円形の刺突文がある。257は、把手の両側が渦巻文となっている。比較的小型の深鉢形土器か、壺形土器のものと思われる。

#### (2) 加曾利E式土器(228～236、242、255)

228～231は頸部から胴部、232～236は胴部の破片で、230・231は、同一固体で、壺形土器かと思われる。以外の土器は深鉢形土器と思われる。

228・229、232～234、251は縄文に加えて縦位の沈線が見られる。251は、深鉢形土器の底部である。底部から大きく膨らむ器形である。縄文は疎らである。233は沈線間がやや盛り上がりつつ隆帯状に見える。沈線は、縄文施文の後に施されている。230・231は口縁部を無文にし、頸部から胴部にかけて渦巻状の文様を隆帯で作り出している。胴部には、縄文を密に施している。

242は、縦位の沈線と、沈線間に縄文と刺突が見られる土器で、壺形土器かと思われる。沈線は、渦巻状に展開する可能性がある。

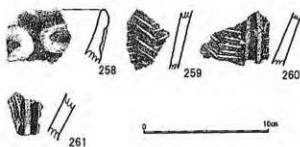


第34图 出土土器实例图



#### 第5項 8トレンチ出土土器(第35図、第3表)

すべて第I群の曾利式土器である。258は、深鉢形土器の口縁部で、口縁部に楕円文かと思われる沈線が見られる(5類)。259・260は、連続する「ハ」の字状の沈線が見られる深鉢形土器の胴部である(3類)。比較的密に連続する「ハ」の字状の沈線を施文している。261は、条線が見られる深鉢形土器の胴部である(1類)。縦位の沈線も見られる。条線はやや斜め方向となっている。



第35図 8トレンチ出土土器実測図

### 第2節 石器

本調査で石器が出土したトレンチは、6・7・8トレンチである。掲載したものは、石器であるもの全て、17点である。石鏃・スクレイパー類・打製石斧・磨製石斧・石錐・磨石・敲石が出土した。

最も出土数が多いのは磨石・敲石類で、石鏃がそれに続く。磨石・敲石は破損しているものが全てだが、ススの付着かと思われるように黒化しているものが多い。また、黒化した後に敲打を加えているものも見られる。

#### 第1項 6トレンチ出土石器(第36図262~272、第4表、写真図版10)

##### (1) 石鏃(262~265)

262~264は凹基無茎鏃、265は平基無茎鏃である。すべて黒曜石製である。262・265は完形であり、262~264は基部を欠損している。

凹基無茎鏃のうち、262は、基部の抉入の深いハート形であり、263・264は基部の抉入の比較的浅い細長い形状のものと思われる。

##### (2) 磨製石斧(267)

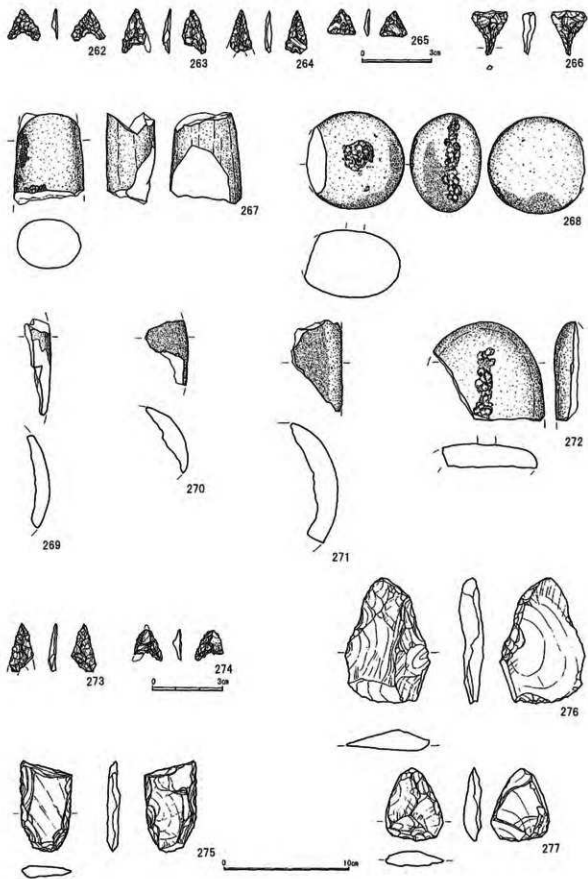
267は、安山岩製の磨製石斧である。断面は楕円形を呈する乳棒状磨製石斧で、基端と刃部を欠損している。表面には、細かな敲打痕が確認され、裏面には、縦方向の整形痕が残存している。

##### (3) 石錐(266)

266は、黒曜石製の石錐である。つまみ部分から錐部までの厚さにはあまり差がなく、錐部も比較的短いものである。

##### (4) 磨石・敲石(268~272)

268は敲打痕が中央部分と縁辺部分に見られる花崗岩製の敲石で、一部を欠損している。断面楕円形の拳大のものである。黒化しており、敲打は黒化の後に行なわれている。269~271は、大部分を欠損しており、全体の形状などは不明であるが、断面楕円形となるようで、268に比べ大型の磨石・敲石と思われる。269には、磨り面が観察されたが、270・271には確認されなかったが、形状・石質よ

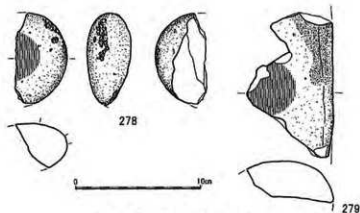


第36图 出土石器实测图①

り磨石・敲石に含めた。270・271は、表面が黒化している。269～271は砂岩製である。272は、中央部分に敲打痕が見られる敲石で、大部分を欠損している。拳大よりやや大きなもので、断面は扁平な楕円形を呈するようである。石材は砂岩である。

第2項 7・8トレンチ出土石器(第36・ 37図273～279、第3表、写真図版10)

(1) 石鏃(273・274)



第37図 出土石器実測図②

273・274は、黒曜石製の石鏃である。いずれも凹基無茎鏃である。273は基部を欠損、274は先端部と基部を欠損している。273は、基部の抉入の比較的浅い細長い形状のもので、274は基部の抉入の深いハート形を呈するものである。

(2) スクレイパー類(275・277)

275は、頁岩製のスクレイパー類である。上部を欠損している。石材の板状節理を利用して剥離を加えており、

刃部は細かな調整を加えて鋸歯状にしている。

277は、砂岩製のスクレイパー類で、剥離は粗く、刃部の整形も雑である。

(3) 打製石斧(276)

276は、ホルンフェルス製の楕形の打製石斧である。完形と思われる。整形は粗く、全体の形状も整っていない。

(4) 磨石・敲石(278・279)

278は中央に磨り面、縁の部分には敲打痕が見られる。半分ほどを欠損しているが、断面楕円形で拳大程度の大きさであったと思われる。石材は安山岩である。279は、7トレンチと8トレンチ出土のものが接合したものである。大部分を欠損している。中央部分には磨り面が確認された。断面は楕円形と思われ、全体の形状も細長い楕円形を呈するかと思われる。石材は閃緑岩である。

第3節 土製品

出土した土製品は、土器片円盤と土器片鏟である。土器片円盤は、6トレンチと7トレンチから出土しており、総数8点である。土器片鏟は、7トレンチから出土しており、総数2点である。

第1項 土器片円盤(第38図280～287、第5表、写真図版9～2)

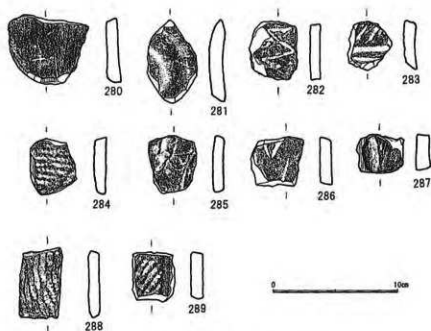
通常の土器片とは違い、周縁に打ち欠きを加えてあるものを充てた。280～283は6トレンチ出土、284～287は7トレンチ出土である。

打ち欠き後に磨り面を持つものは、280・284・287である。磨り面は一部のみにとどまっている。いずれも曾利式土器の深鉢形土器を利用したと思われるもので、連続する「八」の字状の沈線が見ら

れる280～283・286、縄文が見られる284・縦位の条線が見られる287、隆帯による渦巻文かと思われる285がある。出土土器と同じく、曾利Ⅳ～Ⅴ式段階のものと思われる。

**第2項 土器片錘(第38図288・289、第4表、写真図版9-2)**

平面形状が方形を呈し、289などには中央に紐掛け用の打ち欠きが見られるために充てたが、288などは打ち欠きが見られないなど、分類の妥当性を欠くかもしれないが、加えてみた。いずれも縄文が見られる土器で、曾利式土器と思われる。



第38図 土器片円盤実測図

<参考文献>

- 今福利恵 1999 「(9)中期後半(曾利式土器)」『山梨県史 資料編2 原始・古代2考古(遺構・遺物)』
- 榑原功一 2008 「曾利式土器」『総覧縄文土器』
- 末木 健 1981 「2中期の土器 曾利式土器」『縄文文化の研究 4』縄文土器Ⅱ
- 鈴木道之助 1981 『図録石器の基礎知識Ⅲ』
- 鈴木保彦・山本曜久 「加曾利E式土器様式」『縄文土器大観3』中期Ⅰ

第3表 出土土器観察表

No.	トレンチ	層別	器種	時期	部位	計測値 (cm, g)				文様	焼成	胎土	色調	備考
						口径	厚							
1	3	土器	深鉢	管利	口縁	厚	0.9			須藤-Ⅰ区画 ・縄文	普通 灰、長、有、 砂		黒褐色	
2	3	土器	深鉢	管利 E	口縁	厚	1			須藤Ⅰ区画-飯平 状沈積・縄文	普通 灰、長、有、 砂		明黄褐色	
3	3	土器	深鉢	管利 N	胴	厚	0.9			中中 不良 泥、砂	普通 灰、長、有、 砂		黒褐色	
4	5	土器	深鉢	管利 V	頸~ 胴	厚	0.7			連八	中中 不良 泥、砂		明黄褐色	
5	5	土器	深鉢	管利 V	胴	厚	1.2(1.3)			鈴帯・縦位沈 積・連八	普通 灰、長、有、 砂		明褐色	
6	6	土器	深鉢	管利 V	口縁	厚	1.1			鈴帯・条線	普通 灰、長、有、 砂		褐色	
7	6	土器	深鉢	管利 N	口縁	厚	0.9			沈積・横形条 線	普通 灰、長、有、 砂		灰黄	
8	6	土器	深鉢	管利 N	口縁	厚	1.4			縦形条線	普通 灰、長、有、 砂		黒褐色	
9	6	土器	深鉢	管利 V	口縁	厚	1.0(1.5)			鈴帯・弧線・ 連八	普通 灰、長、有、 砂		灰褐色	
10	6	土器	深鉢	管利 V	口縁	厚	0.9(1.1)			鈴帯・Ⅰ区画 ・連八	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	
11	6	土器	深鉢	管利 V	口縁	厚	1.1			横位沈積・Ⅰ 区画・連八	普通 灰、長、有、 砂		褐色	
12	6	土器	深鉢	管利 V	口縁	厚	1.2			横位沈積・連 八	普通 灰、長、有、 砂		黒褐色	
13	6	土器	深鉢	管利 V	口縁	厚	0.8			横位沈積・連 八	普通 灰、長、有、 砂		褐色	
14	6	土器	深鉢	管利 V	口縁	厚	1.2			Ⅰ区画・連 八?	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	
15	6	土器	深鉢	管利 V	口縁	厚	1			須藤・連八	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	
16	6	土器	深鉢	管利 V	口縁	厚	1			須藤	普通 灰、長、有、 砂		黄褐色	
17	6	土器	深鉢	管利 V	口縁	厚	0.9			沈積	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	
18	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	0.9			沈積	普通 灰、長、有、 砂		黒褐色	
19	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	1.1			沈積	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	
20	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	1.1			沈積	普通 灰、長、有、 砂		灰褐色	
21	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	1.4			沈積	普通 灰、長、有、 砂		褐色	波状口縁か
22	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	1			沈積	普通 灰、長、有、 砂		褐色	
23	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	1			沈積	普通 灰、長、有、 砂		褐色	
24	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	1.1			沈積	普通 灰、長、有、 砂		褐色	
25	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	1.2			普通	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	
26	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	1			普通	普通 灰、長、有、 砂		黄褐色	
27	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	1			普通	普通 灰、長、有、 砂		褐色	
28	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	1.4			普通	普通 灰、長、有、 砂		黒褐色	
29	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	0.9			普通	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	
30	6	土器	深鉢	管利 N-V	口縁	厚	0.7			普通	普通 灰、長、有、 砂		褐色	
31	6	土器	深鉢	管利 V?	口縁	厚	0.7			縦位沈積	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	31・32・129~131同一 個体、土器表面磨損 31・32・129~131同一 個体、土器表面磨損
32	6	土器	深鉢	管利 V?	口縁	厚	0.7			縦位沈積	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	
33	6	土器	深鉢	管利 I-V	頸~ 胴	厚	1.1			鈴帯・縦位沈 積	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	外面スリ付
34	6	土器	深鉢	管利 I-V	頸~ 胴	厚								
35	6	土器	深鉢	管利 I-V	頸~ 胴	厚	0.7			縦位沈積	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	外面スリ付
36	6	土器	深鉢	管利 I-V	頸	厚	1.1(1.2)			普通	普通 灰、長、有、 砂		褐色	
37	6	土器	深鉢	管利 I-V	頸	厚	1.0(1.2)			鈴帯	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	
38	6	土器	深鉢	管利 V	頸	厚	1.6(2.1)			鈴帯・連八	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	
39	6	土器	深鉢	管利 V	頸	厚	0.8(1.0)			鈴帯・Ⅰ区画 ・連八	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	
40	6	土器	深鉢	管利 V	頸	厚	1.0(1.4)			鈴帯・沈積、 Ⅰ区画・連八	普通 灰、長、有、 砂		黒褐色	
41	6	土器	深鉢	管利	胴	厚	1.3			鈴帯	普通 灰、長、有、 砂		黒褐色	
42	6	土器	深鉢	管利	胴	厚	1.2			沈積	普通 灰、長、有、 砂		にぶい 黄褐色	

№	トンチ	種別	部種	時期	部位	計測値(cm, g)				文様	焼成	胎土	色調	備考				
43	6	土器	深鉢	曹利	胴	厚	0.7							沈線	普通	英、長、有、砂	橙	
44	6	土器	深鉢	曹利	胴	厚	1.1							渦巻(隆帯)	普通	英、長、有、砂	にぶい黄褐色	内外面赤彩?、大彫?
45	6	土器	深鉢	曹利	胴	厚	1.1							渦巻(隆帯)	普通	英、長、有、砂	黄褐色	外面スス付着
46	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴~ 頸	厚	1.0(1.2)							隆帯・沈線・ 条線(絞杉状?)	普通	英、長、有、 雲、砂	黒褐	外面スス付着
47	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.9(1.4)							沈線・絞杉状 条線	普通	英、長、 有、砂	灰褐~ 淡黄	
48	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴~ 頸	厚	1							沈線・絞杉状 条線	普通	英、長、 有、砂	淡黄	外面スス付着
49	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.8							絞杉状条線	普通	英、長、 有、砂	暗褐	外面スス付着
50	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.9							絞杉状条線	普通	英、長、 有、砂	淡黄褐	外面スス付着
51	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.9(1.1)							渦巻(隆帯)・ 絞杉状条線	普通	英、長、有、 雲、砂	橙	
52	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	1.2							「区画」知行狀 帯・絞杉状条線	普通	英、長、有、 雲、砂	淡黄橙	
53	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.9(1.2)							隆帯・沈線・ 条線(絞杉状?)	普通	英、長、 有、砂	灰褐	
54	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.9							隆帯・沈線・ 横位条線	普通	英、長、 有、砂	にぶい 橙	
55	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.6							横位条線	普通	英、長、 有、砂	にぶい 橙	
56	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.8							細位沈線・横 位条線	普通	英、長、 有、砂	にぶい 橙	
57	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	1.2							沈線・絞杉状 条線	普通	英、長、有、 雲、砂	にぶい 橙	破断面・外面スス付 着
58	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	1.1							絞杉状条線・絞 杉状条線	普通	英、長、 有、砂	にぶい 赤褐	
59	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.8							隆帯・沈線・ 絞杉状条線	普通	英、長、 有、砂	にぶい 橙	
60	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	1.1							絞杉状条線	普通	英、長、有、 雲、砂	赤褐	
61	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.7							横位条線	普通	英、長、有、 雲、砂	褐	
62	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	1							絞杉状条線	普通	英、長、 有、多、砂	明黄褐	
63	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.8							横位条線	普通	英、長、 有、砂	にぶい 赤褐	
64	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.8							隆帯・沈線・ 柳倉状刺突	普通	英、長、有、 雲、砂	黒褐	
65	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	1.3							柳倉状刺突	普通	英、長、 有、砂	にぶい 黄橙	
66	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	1.2							柳倉状刺突	普通	英、長、多、 有、砂	にぶい 橙	
67	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	1.1							沈線・柳倉状 刺突	普通	英、長、 有、多、砂	にぶい 橙	
68	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴	厚	0.8							沈線・柳倉状 刺突	普通	英、長、 有、砂	淡黄橙	
69	6	土器	深鉢	曹利Ⅳ	胴~ 頸	厚	0.9							柳倉状刺突	普通	英、長、 有、砂	にぶい 黄橙	
70	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	0.9(1.2)							隆帯・連八	普通	英、長、有、 雲、砂	にぶい 黄橙	
71	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	0.9(1.1)							隆帯・連八	普通	英、長、有、 雲、砂	にぶい 橙	
72	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	0.8							沈線	普通	英、長、 有、砂	にぶい 橙	
73	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	0.7							連八	普通	英、長、有、 雲、砂	黄橙	
74	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	1.1							連八	普通	英、長、多、 有、雲、砂	にぶい 黄橙	
75	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	1.1							連八	普通	英、長、 有、多、砂	淡黄橙	
76	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	1							横位沈線・連 八	普通	英、長、 有、砂	暗褐	
77	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	0.8							「区画」連八	普通	英、長、 有、雲、砂	黒褐	
78	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	1.3(1.7)							隆帯・連八	普通	英、長、多、 有、雲、砂	橙	
79	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	1.2(1.6)							渦巻(隆帯)・ 沈線・連八	普通	英、長、多、 有、雲、砂	明赤褐	
80	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	1							渦巻(沈線)・ 連八	普通	英、長、多、 有、雲、砂	にぶい 黄橙	
81	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	1.2(1.6)							隆帯・沈線・ 刺突	普通	英、長、 有、砂	黄橙	
82	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	0.9(1.1)							沈線・連八	普通	英、長、 有、砂	黄橙	
83	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	1.2							隆帯・連八	普通	英、長、 有、砂	褐	
84	6	土器	壺?	曹利Ⅴ	胴	厚	0.9(1.6)							隆帯・沈線	普通	英、長、有、 雲、砂	にぶい 橙	把手付き
85	6	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	1							連八	普通	英、長、多、 有、砂	にぶい 橙	外面スス付着



№	トレンチ	種別	發掘時期	部位	計測値 (cm, g)				文様	焼成	胎土	色調	備考
129	6	土器	深鉢	舍利 V?	胴	厚	0.8		縦位文様	普通	灰、長、有、雲、砂	淡黄緑	31・32・128~131間 個体、土器表面施陶化
130	6	土器	深鉢	舍利 V?	胴	厚	0.8		縦位文様	普通	灰、長、有、雲、砂	淡黄緑	31・32・128~131間 個体、土器表面施陶化
131	6	土器	深鉢	舍利 V?	胴	厚	0.8		縦位文様	普通	灰、長、有、雲、砂	淡黄緑	31・32・128~131間 個体、土器表面施陶化
132	6	土器	深鉢		胴	厚	1		縦位文様	普通	灰、長、有、雲、砂	淡黄緑	
133	6	土器	深鉢	舍利	底	厚	1.6		隆帯	普通	灰、長、有、雲、砂	にぶい 黄	
134	7	土器	深鉢	舍利 III-V	口縁	厚	0.8(1.2)		隆帯・I区画・ 横位文様	普通	灰、長、有、雲、砂	明褐	
135	7	土器	深鉢	舍利 I-V	口縁	厚	1.2		隆帯	普通	灰、長、有、雲、砂	明褐	
136	7	土器	深鉢	舍利 V	口縁	厚	1.2		隆帯・I区画 普通	灰、長、有、雲、砂	灰褐		
137	7	土器	深鉢	舍利 V	口縁	厚	0.8		横位文様・連八	普通	灰、長、有、雲、砂	にぶい 黄	
138	7	土器	深鉢	舍利 V	口縁	厚	0.9		横位文様・刺突	普通	灰、長、有、雲、砂	にぶい 黄	
139	7	土器	深鉢	舍利 V	口縁	厚	1.1(1.2)		隆帯・I区画 普通	灰、長、有、雲、砂	灰褐		
140	7	土器	深鉢	舍利 V	口縁	厚	1		沈線・I区画 普通	灰、長、有、雲、砂	黄		
141	7	土器	深鉢	舍利 V	口縁	厚	1		横位文様・連八	普通	灰、長、有、雲、砂	黒褐	
142	7	土器	深鉢	舍利 V	口縁	厚	0.6		連八	普通	灰、長、有、雲、砂	黄	
143	7	土器	深鉢	舍利 V	口縁	厚	0.9		隆帯・南西面・ 背沈線・連八	普通	灰、長、有、雲、砂	にぶい 黄	
144	7	土器	深鉢	舍利 IV-V	口縁	厚	1.2		横位文様・I 区画、沈線	普通	灰、長、有、雲、砂	黒褐	炭灰口縁か
145	7	土器	深鉢	舍利 III-V	口縁	厚	0.8		隆帯、I区画 普通	灰、長、有、雲、砂	明褐		
146	7	土器	深鉢	舍利 III-V	口縁	厚	0.9		隆帯	普通	灰、長、有、雲、砂	にぶい 黄	
147	7	土器	深鉢	舍利 IV-V	口縁	厚	1.2		横位文様	普通	灰、長、有、雲、砂	にぶい 黄	
148	7	土器	深鉢	舍利 IV-V	口縁	厚	1		横位文様・I 区画	普通	灰、長、有、雲、砂	淡黄緑	
149	7	土器	深鉢	舍利 IV-V	口縁	厚	1.3		横位文様	普通	灰、長、有、雲、砂	明褐	胎土色
150	7	土器	深鉢	舍利 IV-V	口縁	厚	1.3		横位文様	普通	灰、長、有、雲、砂	黒褐	
151	7	土器	深鉢	舍利 IV-V	口縁	厚	1.2		横位文様	普通	灰、長、有、雲、砂	黒褐	
152	7	土器	深鉢	舍利 IV-V	口縁	厚	1		横位文様	普通	灰、長、有、雲、砂	黒褐	
153	7	土器	深鉢	舍利	口縁	厚	1.3			普通	灰、長、有、雲、砂	明赤褐	
154	7	土器	深鉢	舍利	口縁	厚	1.4			普通	灰、長、有、雲、砂	明黄緑	
155	7	土器	深鉢	舍利	口縁	厚	1.2			普通	灰、長、有、雲、砂	黄	
156	7	土器	深鉢	舍利 III-V	胴	厚	1.3		渦巻	普通	灰、長、有、雲、砂	にぶい 黄	
157	7	土器	深鉢	舍利 III-V	胴	厚	1.4		隆帯(渦巻か)	普通	灰、長、有、雲、砂	赤褐	
158	7	土器	深鉢	舍利 III-V	胴	厚	0.8(1.1)		渦巻(隆帯)	普通	灰、長、有、雲、砂	にぶい 黄	
159	7	土器	深鉢	舍利 III-V	胴	厚	0.8(1.1)		隆帯(渦巻か) ・沈線	普通	灰、長、有、雲、砂	明褐	
160	7	土器	深鉢	舍利 III-V	胴	厚	1		渦巻	普通	灰、長、有、雲、砂	にぶい 黄	
161	7	土器	深鉢	舍利 III-V	胴	厚	0.8		渦巻	普通	灰、長、有、雲、砂	灰褐	
162	7	土器	深鉢	舍利 I-V	口縁	厚	0.9(1.4)		隆帯・横位文 様	普通	灰、長、有、雲、砂	明褐	
163	7	土器	深鉢	舍利 I-V	口縁	厚	1.1		隆帯・横位文 様	普通	灰、長、有、雲、砂	明褐	
164	7	土器	深鉢	舍利 I-V	口縁	厚	1		横位文様	良	灰、長、有、雲、砂	黒褐	
165	7	土器	深鉢	舍利 IV	頸	厚	0.7(1.1)		隆帯・条線 (横杉状?)	普通	灰、長、有、雲、砂	灰褐	
166	7	土器	深鉢	舍利 IV	頸	厚	0.8(1.1)		隆帯・沈線・ 脚置伏型突	普通	灰、長、有、雲、砂	暗褐	
167	7	土器	深鉢	舍利 IV	頸	厚	0.9(1.1)		隆帯・横位文 様(横杉状?)	普通	灰、長、有、雲、砂	黄	
168	7	土器	深鉢	舍利 IV	頸	厚	1.2		隆帯・南西面・ I区画、条線	普通	灰、長、有、雲、砂	黒褐	
169	7	土器	深鉢	舍利 IV	頸	厚	1.1(1.2)		隆帯・条線 (横杉状?)	中や 不良	灰、長、有、雲、砂	暗褐	
170	7	土器	深鉢	舍利 IV	頸	厚	1.1(1.2)		隆帯・横位文 様	普通	灰、長、有、雲、砂	黄褐	
171	7	土器	深鉢	舍利 IV	頸	厚	1		横位文様・横 杉状条線	普通	灰、長、有、雲、砂	黄	内面又付着



№	トレンチ	種別	器種	時期	部位	計測値 (cm, g)				文様	焼成	胎土	色調	備考	
172	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛～ 脚	厚	0.9								
173	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.8(1.0)								
174	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.1								
175	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.8(1.0)								
176	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.7(0.8)								内面ス入付着
177	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.0(1.2)								
178	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.8(0.7)								
179	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.8								
180	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.1								
181	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.9								
182	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.8								
183	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.1(1.3)								
184	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1								
185	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1								
186	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.1								
187	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.9								
188	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1								内面ス入付着
189	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.9								
190	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.9								
191	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.9								
192	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.1								
193	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.8								
194	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.1								
195	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.9								
196	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.9								
197	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.2								
198	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1								
199	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.1(1.5)								
200	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.1(1.4)								
201	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.9								
202	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.2								
203	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.8								
204	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.8								内面ス入付着
205	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.1								
206	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.8								
207	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.2								
208	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1								
209	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.8								
210	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.8								
211	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.9								
212	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.8								
213	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	1.2(1.4)								
214	7	土器	深鉢	管利Ⅳ	脛	厚	0.9(1.1)								

No.	トレンチ	種別	器種	時期	部位	計測値 (cm, g)				文様	焼成	胎土	色調	備考
						厚	径	口径	底径					
215	7	土器	深鉢	曹利V	胴	厚	0.9(1.1)			残帯・縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	黒褐色	
216	7	土器	深鉢	曹利V	胴	厚	0.9(1.1)			縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	緑	
217	7	土器	深鉢	曹利V	胴	厚	0.8(0.9)			残帯・縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	明赤褐色	
218	7	土器	深鉢	曹利V	胴	厚	1.0(1.2)			残帯・縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	緑	
219	7	土器	深鉢	曹利V	胴	厚	1.2(1.3)			残帯・縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	緑	
220	7	土器	深鉢	曹利V	胴	厚	0.8			残帯・縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	にぶい黄褐色	
221	7	土器	深鉢	曹利V	胴	厚	0.9			縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	黒褐色	
222	7	土器	深鉢	曹利V	胴	厚	0.9			縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	にぶい緑	
223	7	土器	深鉢	曹利V	胴	厚	1.1			縦位沈線・残带状沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	明褐色	
224	7	土器	深鉢	曹利V	胴	厚	1.1			蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	にぶい黄褐色	
225	7	土器	深鉢	曹利V	胴	厚	1.3			残帯・縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	赤褐色	
226	7	土器	深鉢	曹利V	底	厚	0.8			縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	明褐色	
227	7	土器	深鉢	曹利V	底	厚	0.9			蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	明褐色	
228	7	土器	深鉢	加曹利E3-4	胴	厚	1.1			縦位沈線・縄文	普通	英・長・有・雲・砂	緑	
229	7	土器	深鉢	加曹利E3-4	胴	厚	0.9			縦位沈線・縄文	普通	英・長・有・雲・砂	明褐色	
230	7	土器	蓋?	加曹利E3-4	蓋	厚	0.8(1.0)			残帯・縄文	普通	英・長・有・雲・砂	にぶい緑	231と同一器体
231	7	土器	蓋?	加曹利E3-4	蓋	厚	0.9(1.0)			残帯・縄文	普通	英・長・有・雲・砂	にぶい黄褐色	230と同一器体
232	7	土器	深鉢	加曹利E3-4	胴	厚	1.1			縦位沈線・縄文	普通	英・長・有・雲・砂	明褐色	
233	7	土器	深鉢	加曹利E3-4	胴	厚	1.2			縦位沈線・縄文	普通	英・長・有・雲・砂	灰褐色	
234	7	土器	深鉢	加曹利E3-4	胴	厚	1			縦位沈線・縄文	普通	英・長・有・雲・砂	にぶい緑	
235	7	土器	深鉢	加曹利E3-4	胴	厚	1.3			残帯・縦位沈線・縄文	中や不良	英・長・有・雲・砂	明褐色	
236	7	土器	深鉢	加曹利E3-4	胴	厚	0.9			縄文	普通	英・長・有・雲・砂	緑	
237	7	土器	深鉢	曹利	底	厚	1.1(1.5)			残帯・縦位沈線	普通	英・長・有・雲・砂	にぶい黄褐色	
238	7	土器	深鉢	曹利	底	厚	1.1(1.4)			残帯・縦位沈線	普通	英・長・有・雲・砂	黄褐色	
239	7	土器	深鉢	曹利	底	厚	1.2			縦位沈線	普通	英・長・有・雲・砂	明赤褐色	
240	7	土器	深鉢	曹利	底	厚	1.2			縦位沈線	普通	英・長・有・雲・砂	緑	
241	7	土器	深鉢	曹利	底	厚	0.8			縦位沈線	普通	英・長・有・雲・砂	黒褐色	
242	7	土器	蓋?	加曹利E3-4	蓋	厚	1.1			沈線・縄文	普通	英・長・有・雲・砂	にぶい黄褐色	
243	6	土器	深鉢	曹利I-IV	口径	厚	1.0(1.5)			残帯・縦位沈線	普通	英・長・有・雲・砂	暗褐色	
244	6	土器	深鉢	曹利I-IV	口径	厚	0.7(1.6)			残帯・縦位沈線	普通	英・長・有・雲・砂	暗褐色	外面ス入付層
245	7	土器	蓋?	曹利I-IV	口径	厚	0.9(3.1)	径	(19.0)	残帯(残帯)・縦位沈線	普通	英・長・有・雲・砂	にぶい黄褐色	外面赤彩?、把手付
246	6	土器	深鉢	曹利V	口径	厚	1	口径	(26.0)	残帯・縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	灰褐色	残存1/4以下
247	7	土器	深鉢	曹利V	口径	厚	1.3	口径	(31.2)	縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	外底ス入付層・残存1/4以下	にぶい黄褐色
248	7	土器	深鉢	曹利I-IV	口径	厚	1.0(4.3)			残帯(残帯)	普通	英・長・有・雲・砂	黒褐色	把手付き
249	6	土器	深鉢	曹利	口径	厚	1.0(1.2)			残帯	普通	英・長・有・雲・砂	黄褐色	
250	7	土器	深鉢	曹利	底	厚	2.1	底径	(8.0)	縦位沈線	中や不良	英・長・有・雲・砂	緑灰	残存1/4以下
251	7	土器	深鉢	加曹利E3-4	底	厚	1.6	底径	(8.1)	縦位沈線・縄文	普通	英・長・有・雲・砂	灰褐色	内底ス入付層・残存底部1/4以下
252	6	土器	深鉢	曹利V	底	厚	1.5	底径	(8.0)	縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	にぶい黄褐色	蓮部本葉面まで消し
253	6	土器	深鉢	曹利	底	厚	1.3	底径	(7.9)	縦位沈線・蓮八	普通	英・長・有・雲・砂	緑	残存底部1/4以下・破面面炭化物付層
254	6	土器	深鉢	曹利	底	厚	1.1	底径	(6.8)	縦位沈線	普通	英・長・有・雲・砂	灰黄褐色	残存底部1/4以下・破面面炭化物付層
255	6	土器	曹利	把手	厚	2.1(2.5)				普通	英・長・有・雲・砂	にぶい黄褐色		
256	7	土器	曹利	把手	厚	1.0(2.5)				中や不良	英・長・有・雲・砂	にぶい緑		

No.	トレンチ	種別	器種	時期	部位	計測値 (cm, g)				文様	焼成	胎土	色調	備考
						厚	長	巾	重					
257	7	土器		曹利	把手	厚	0.9(4.4)							
258	8	土器	深鉢	曹利Ⅴ	口縁	厚	1.2							
259	8	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	0.7							
260	8	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	0.7							
261	8	土器	深鉢	曹利Ⅴ	胴	厚	1							

第4表 出土石器観察表

No.	トレンチ	種別	器種	石材	分類	計測値 (cm, g)				備考	
						長	巾	厚	重		
262	6	石器	石鉄	黒曜石	石鉄	長	1.3	巾 1.3	厚 0.16	重 0.2	完形
263	6	石器	石鉄	黒曜石	石鉄	長	(1.8)	巾 (1.0)	厚 0.29	重 (0.4)	先端欠損、基部欠損
264	6	石器	石鉄	黒曜石	石鉄	長	(1.8)	巾 (0.9)	厚 0.20	重 (0.3)	先端欠損、基部欠損
265	6	石器	石鉄	黒曜石	石鉄	長	1.1	巾 1.1	厚 0.18	重 0.2	完形、一部原形面残存
266	6	石器	石鉄	黒曜石	石鉄	長	1.9	巾 1.5	厚 0.55	重 1.2	完形
267	6	石器	磨製石片	安山岩	乳神杖	長	(7.2)	巾 5.6	厚 3.9	重 (234)	基部残存
268	6	石器	磨石	花崗岩	磨石	長	7.6	巾 (7.7)	厚 5.5	重 (434)	一部欠損、裏打筋にスス付着
269	6	石器	磨石	砂岩	磨石	長	(7.4)	巾 (1.9)	厚 (6.5)	重 (82)	
270	6	石器	磨石?	砂岩	磨石?	長	(5.0)	巾 (3.3)	厚 (3.0)	重 (30)	表面スス付着
271	6	石器	磨石?	砂岩	磨石?	長	(7.0)	巾 (3.9)	厚 (7.5)	重 (136)	
272	6	石器	磨石	砂岩	磨石	長	(7.7)	巾 (7.7)	厚 (1.8)	重 (156)	残存1/4以下
273	7	石器	石鉄	黒曜石	石鉄	長	(2.0)	巾 (1.0)	厚 (0.27)	重 (0.4)	
274	7	石器	石鉄	黒曜石	石鉄	長	(1.3)	巾 (1.2)	厚 0.27	重 (0.3)	先端欠損、基部欠損
275	7	石器	スクレイパー	頁岩	スクレイパー	長	(5.2)	巾 4.0	厚 0.9	重 34	
276	7	石器	打製石片	ホルンフォルス	打製石片	長	9.8	巾 6.3	厚 1.7	重 118	完形
277	7	石器	スクレイパー	砂岩	スクレイパー	長	5.7	巾 4.6	厚 1.2	重 32	完形
278	7	石器	磨石	安山岩	磨石	長	(7.1)	巾 (4.1)	厚 (3.5)	重 (110)	残存1/3
279	7,8	石器	磨石	花崗岩	磨石	長	(11.2)	巾 (6.7)	厚 (5.5)	重 (370)	残存1/4以下、表面スス付着

第5表 出土土製品観察表

No.	トレンチ	種別	器種	時期	部位	計測値 (cm, g)				文様	焼成	胎土	色調	備考
						長	巾	厚	重					
280	6	土器片	深鉢	曹利Ⅴ	胴	長	5.1	巾 6.3	厚 1.1	重 41.1				
281	6	土器片	深鉢	曹利Ⅴ	胴	長	6.5	巾 4.0	厚 1.2	重 33.2				
282	6	土器片	深鉢	曹利Ⅴ	胴	長	4.5	巾 3.8	厚 0.8	重 21.3				
283	6	土器片	深鉢	曹利Ⅴ	胴	長	3.8	巾 3.3	厚 1.0	重 14.1				
284	7	土器片	深鉢	曹利?	胴	長	4.5	巾 3.5	厚 0.9	重 15.7				
285	7	土器片	深鉢	曹利?	胴	長	4.4	巾 3.8	厚 0.9	重 19.0				
286	7	土器片	深鉢	曹利Ⅴ	胴	長	4.7	巾 3.9	厚 1.0	重 18.3				
287	7	土器片	深鉢	曹利Ⅴ	胴	長	3.6	巾 3.1	厚 1.2	重 14.1				
288	7	土器片	深鉢	曹利	胴	長	5.3	巾 3.3	厚 0.9	重 22.5				
289	7	土器片	深鉢	曹利	胴	長	3.8	巾 3.3	厚 1.0	重 19.0				

## 第V章 千居遺跡第I・II次調査出土土器に関する所見

### 第1節 はじめに

昭和45年から翌年まで行われた千居遺跡第I・II次調査における出土土器は加藤学園考古学研究所により既に報告されたもの(加藤学園考古学研究所1975)だが、富士宮市教育委員会では大石寺が保管する第I・II次調査時の出土土器全39点(註1)に関して再整理を実施し、詳細なデータの作成を行った。(第6表)

本稿では、大石寺が保管する千居遺跡第I・II次調査時出土土器の新たに作成した実測図を掲載するとともに、昭和50年の報告ではふれられず、今回の再整理で得られた所見や土器に施文された文様の割合等から周辺の同時期の遺跡と比べて何らかの差異が見出せないかということにふれていくこととする。

なお、本稿で引用した遺跡の遺構名に関しては原典となる各報告書において使用されている名称を用いた。

### 第2節 遺構伴出資料(第39図～第43図18～21・写真図版11・12)

大石寺が保管する土器のうち、遺構に伴うものは全23点となる。遺構に伴う土器は住居に伴うものが最も多く18点、配石に伴うものが3点、土壌に伴うものが2点となる。器種組成は深鉢形土器(註2)が22点、浅鉢形土器が1点となる。

住居址に伴う深鉢形土器には条線文を施文するもの(1、11、12、14、15、17)、縄文を施文するもの(5、7、9、18)、ヘラ描きによる連ハ文、短沈線文を施文するもの(2、3、4、10、16、21～23)、櫛歯状刺突文を施文するもの(6)の他に隆帯文と沈線文を施文するものがある。

配石、土壌に伴う土器には条線文、縄文を施文するものは認められず、ヘラ描きによる連ハ文を施文するもの(21～23)、沈線文のみを施文するもの(19、20)がある。

条線文を施文する土器のうち、5は磨消縄文が施文されていることが今回の再整理で判明した。タイプと沈線文等により区画された部分に綾杉状、縦位の条線文と沈線による垂下文(17除く)を施文するタイプの2者が認められ、曾利IV式段階のものと考えられる。14は扇状の条線文を施文した類例の少ない文様だが、後者の変型ともいえる文様である。今回掲載した条線文を施文する縄文土器はいずれも曾利IV式段階のものといえる。

縄文を施文する土器のうち、5は磨消縄文が施文されていることが今回の再整理で判明した。

ヘラ描きによる連ハ文を施文する土器は再整理を行ったものの中では最も数が多く、22、23のように大型のものもある。このタイプの文様を施文するものは22、23を除き、沈線文を伴っている。『千居』において22、23の2点は「千居I式」とされ、型的に先行するものとされたが、これらの縄文土器はいずれも曾利V式段階のものといえる。

20は『千居』では無文の土器として報告されたものだが、今回の再整理で鉤手状の沈線文が施文されていることが判明した。

遺構に伴う土器のうち、再整理の対象となったものをみる限りでは配石、土壌に伴う土器の中には曾利IV式段階のものは確認されず、第1、13、16住居址が曾利IV式段階に構築され、第2住居址の他、第3配石、第1・第2土壌等が曾利V式段階に構築されたことも考えられる。

### 第3節 遺構外出土資料(第43図24～27、第44図・写真図版13)

遺構外出土の土器は全16点となる。器種組成は深鉢形土器、浅鉢形土器、両耳壺、把手付土器、小型土器により構成される。

文様別にみると条線文を施文するもの(26、27)、縄文を施文するもの(30、31、36、37)、ヘラ描きによる連ハ文、短沈線文を施文するもの(24、28)、櫛歯状刺突文を施文するもの(25、35)があり遺構伴出土器とそれほど変わらないが、隆帯のみを施文するもの(38)や沈線文のみを施文するもの(29、33、34、39)、無文のもの(32)がある。

36は施文された縄文の観察が非常に困難なほど外面部分の剥離が激しく、これは土器の焼成によるものではなく、繰り返し煮炊きに使われたことによるものとみられる。35は曾利V式段階にみられる両耳壺である。38は『千居』では詳しくはふれられていないが、胴部、頸部にかけて隆帯による区画文を施文するといった特徴から曾利V式段階にみられる把手を有する壺形土器の変型といえる器形である。39は『千居』ではコップ形土器として報告されている小型の土器である。成形は手捏ねによるものであり、文様は沈線文を不規則に施文したものであるが、把手の痕跡が確認されることから、実際にコップとして使われたことも考えられる。

遺構外出土の土器には一部土器型式の特定が困難なものもあるが、曾利IV式、V式段階に属するものと考えられる。

### 第4節 文様からみた割合

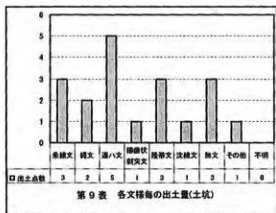
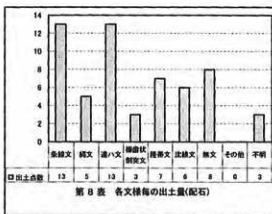
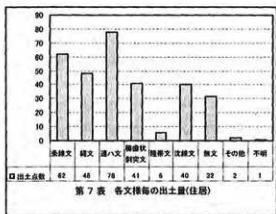
千居遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査の成果をまとめた報告書『千居』では全888点の土器が図化され実測図、拓本が掲載されている。完形、略完形土器のうち、今回新たに再整理を行った土器に関しては前述の通りであるが、その他に『千居』第66図に掲載された台付土器、拓本が掲載されている破片資料や今回の再整理で現物が確認できなかった完形、略完形の土器に関しても文様構成等から何らかの傾向が見出せないかということにふれてみる。

第Ⅰ・Ⅱ次調査の報告書『千居』では出土土器の主体とする文様を7種類[条線文、縄文、篋面引掻文(連ハ文)、櫛目短線文(櫛歯状刺突文)、隆帯文、沈線文、無文]に分けて分類を行っていたが、本稿では主体とする文様を条線文、縄文、連ハ文、櫛歯状刺突文、隆帯文、沈線文、その他の文様(短沈線文、円形刺突文等)、無文、不明の7種類に分けて分類を行った。

#### 第1項 遺構伴出土器

住居址、配石、土坑出土の破片資料のうち、実測図、拓本が掲載された資料は全390点となる。数量的には住居址に伴うものが多く、全320点となる。

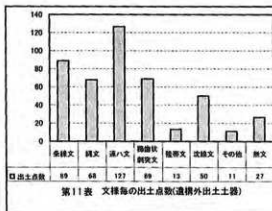
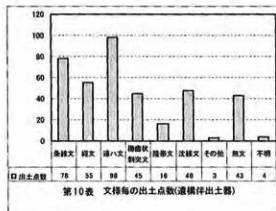
遺構に伴う破片資料を文様別にグラフにまとめた場合、最も多く確認されたものがヘラ描きによる連ハ文であることがうかがえる(第7～10表)。次いで条線文が多くみられ、縄文を施文するものが次ぐ。このような傾向は若干の差異はあるものの、住居、配石、土坑に共通してみられる。



## 第2項 遺構外・グリッド出土土器、表探資料

遺構外・グリッド出土土器、表探による破片資料は全452点が掲載されている。千居遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査時の出土土器は全体の53%が遺構外からの出土資料により占められている。

文様別にみても縄文を施文するものと櫛歯状刺突文を施文するものがほぼ同じ割合になる等、一部異なる点はあるが遺構伴出土器の場合と同じく、最も多い割合を占めるものがヘラ描きによる連ハ文を施文する土器である(第11表)。



ここまで第Ⅰ・Ⅱ次調査における出土土器を施文された文様の割合でみてきた。第Ⅰ・Ⅱ次調査における出土土器は、縄文時代中期後半の土器型式である曾利Ⅳ式・Ⅴ式段階のものである。

全888点という数字はあくまでも完形、略完形、破片資料全てを合わせた数であり、出土土器の表

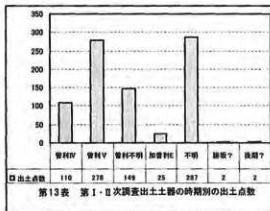
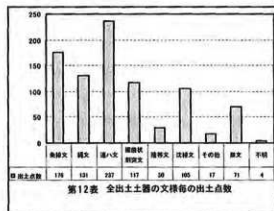
数そのものを表しているわけではないが、『千居』で掲載された土器全てを施文された文様の割合でみると曾利V式段階に盛行するヘラ描きによる連ハ文が最も多く全体の27%を占め、条線文が次いで多く、全体では20%となる。縄文、櫛歯状刺突文がほぼ同じ割合でそれぞれ15%、13%となる。全体の8%を占める無文の破片資料に関しては掲載された全69点中53点が口縁部の部分である。

条線文は一部、曾利V式段階にも施文される例があるが、主体となるのは曾利IV式段階である。出土土器全体で15%を占める櫛歯状刺突文は曾利IV式段階から施文される例があり、破片資料のなかには詳細な時期の判別が困難なものもあるが、主体となるのは次の曾利V式段階である。今回、曾利IV式段階の櫛歯状刺突文を施文する土器がどの程度含まれるかは掴めなかったが、その多くは曾利V式段階と考えられる。

なお、遺構に伴う破片資料のうち、第1配石では2点、第10配石では3点、曾利IV式段階のものと考えられるものがあり、配石の構築が曾利IV式段階にさかのぼる可能性があるが、量的には曾利V式ほどではない。

加曾利E式土器に関しては第2図掲載の9と第6図掲載の31の2点は底部からの立ち上がりや縄文、沈線文の施文方法から加曾利E式系統と考えられるものがある。破片資料のなかにも加曾利E式土器と考えられるものがあるが、全体に占める割合は少ない。

千居遺跡第I・II次調査出土土器は曾利IV式、V式段階の土器により構成され、土器型式が判別できるものをみる限りでは主体となるのはヘラ描きによる連ハ文を施文する曾利V式段階の土器といえる(第12・13表)。



### 第3項 同時期の遺跡との比較

千居遺跡第I・II次調査時の出土土器は曾利IV式、V式段階の土器により構成される。

富士山西南麓では縄文時代中期に遺跡数が増加することが指摘され、千居遺跡の周辺でも滝戸遺跡や箕輪A・B遺跡、天間沢遺跡、破魔射場遺跡等、多くの遺跡で縄文時代中期の曾利式土器、加曾利E式土器が多く確認され、なかには千居遺跡と同じく配石遺構が確認されている遺跡もある。箕輪A遺跡は現在のところ配石は確認されていないが、縄文時代中期の参考例として取り上げた。

ここでは千居遺跡と同時期である縄文時代中期の段階で配石が構築された遺跡を取り上げ、各遺跡における土器の様相を概観していく。なお、比較の対象とした土器には破片資料も含まれ、実数は不明な部分もあることをおことわりしておく。

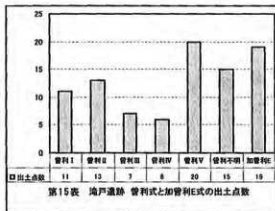
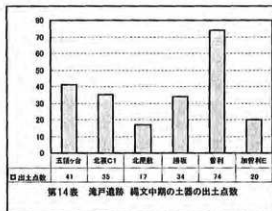
#### (1) 滝戸遺跡

富士宮市野中に所在する遺跡である。これまでの調査により勝坂Ⅲ式、曾利I式段階に第II次調査

区で弧状となる配石が構築され、曾利Ⅲ式段階には隣接する位置に3基の埋壺、焼土を伴う円形の配石が構築され、北西へ約60m離れた第3次調査区に径35mの円形配石が構築されている。第Ⅱ調査区から北側へ約70m離れた第6次調査区でも同時期の楕円形の配石が検出されている。また、詳細な時期は不明だが、石棒を埋納した土坑も検出されている。曾利Ⅳ・Ⅴ式段階の遺構は埋壺が検出されている(富士宮市教育委員会1983、1997、2007)。

縄文時代中期の土器は五領ヶ台式、東海地方西部の北裏C1式、北屋敷式土器、勝坂式土器、曾利式土器、加曾利E式土器が出土している。これまでの調査により曾利式土器を中心とすることが判明している(第14表)。

曾利式段階の土器の様相としては、曾利Ⅲ式段階に確認される土器の数量が減少し、Ⅴ式段階にやや増加する傾向がうかがえる(第15表)。



## (2) 滝ノ上遺跡

富士宮市杉田に所在する。A地区では礫を半円形、楕円形に配置した配石が3基検出され、いずれも石皿が確認されている。B地区では配石墓と報告されているものが3基(うち1基は後期)、礫を環状に配置した焼土、土坑を伴う配石が1基検出されている。A地区の配石は時期を判断できる遺物が乏しいために詳細は不明だが、B地区の第4号配石は曾利Ⅳ式段階の構築と考えられる(静岡県清水土地改良事務所・富士宮市教育委員会1981)。

滝ノ上遺跡の出土土器は土器型式が判別できるものをみ限りでは曾利Ⅴ式段階での増加がうかがえる。また、他の遺跡と異なり加曾利EⅣ式の割合が多く曾利Ⅳ、Ⅴ式段階の出土量を上回り、中期段階の土器の約4分の1を占める(第16表)。

## (3) 天間沢遺跡

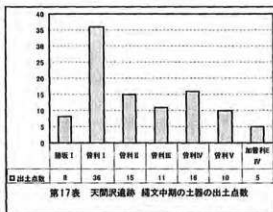
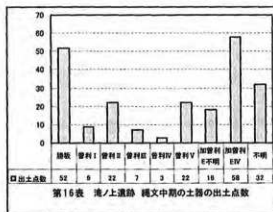
富士市天間に所在する。A～Fの6地点と横道下地点から縄文時代中期中葉から後期前半の住居址、集石土坑、土坑、带状の配石、散布地等が確認されている(富士市教育委員会1984、1985)。これまでの調査で中央部分に広場のような空間を設け、そこに下部に掘り込みを伴わない集石が構築され、その周囲に带状の配石、住居が構築されることが判明している。横道下地区では古富士火山活動による溶岩露頭を囲むような状況で带状にめぐる配石が確認されている。配石の構築はA、B、C、F地区では曾利Ⅳ・Ⅴ式と推測され、横道下地区の北配石は曾利Ⅰ・Ⅱ式、南配石は曾利Ⅳ式段階での構築が推測されている。

縄文時代中期の土器は、勝坂式段階のものから曾利Ⅴ式段階のものが確認されている(第17表)。それらのなかで、編年的な位置づけがはっきりしているものは107点ある。数量的には勝坂式段階のものが多く、曾利Ⅳ式・Ⅴ式段階の土器は一部前後する段階のものに含まれるものの曾利Ⅳ式段階のもの



のがやや多いが、数量的には勝坂式段階ほどではない。

また、この表には示していないが、報文では曾利Ⅳ式段階の前半で土器の出土量が現象することが指摘されている。



#### (4) 南原遺跡

富士郡芝川町長貫字桶金に所在する。これまでの調査では縄文中期の遺構は環状になるとみられる配石の他に竪穴住居址、土坑が確認されている。なお、配石の下からは深鉢形土器を埋設した土坑が検出されている(芝川町教育委員会1985)。配石の構築は曾利Ⅴ式段階と考えられる。

出土した土器は小破片の状態で出土したものが多く、細別が困難のものもあるが、縄文時代中期の土器は勝坂式、曾利式土器が確認されている。発掘調査が行われたのは遺跡範囲の一部ではあるが、残存状況から土器型式で主体となるのは曾利Ⅴ式段階といえる。

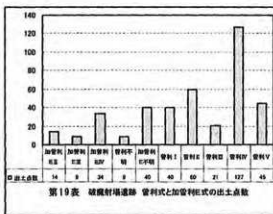
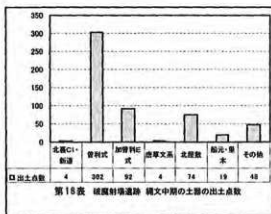
#### (5) 破魔射場遺跡

富士市岩淵に所在する。縄文時代中期後半段階に住居址の周囲に配石遺構が構築されている。配石遺構は、調査区の西側では集礫群と土坑を伴う配石、東側では屋外埋壘土器群、直線状、弧状となる配石、小環状となる小配石群が住居址の周囲から検出されている(財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所2001)。

出土した縄文時代中期の土器は、曾利式土器が過半数を占める他、東海西部系の土器である北裏C1式や船元式土器などが確認されている。北裏C1土器は全体では14%を占めているが、その多くは破片での出土のため、実数は不明な部分が多い(第18表)。

破魔射場遺跡出土土器のうち、曾利式系統の土器と加曾利EⅡ式系統の割合もグラフに示した(第19表)。このグラフの中で「曾利不明」としたものは列点文を地文とするもので、9点が確認されている。「加曾利E不明」としたものは、底部のみのもの、曾利式の影響を受けたもの、連弧文土器や小型土器が含まれ、40点が確認されている。

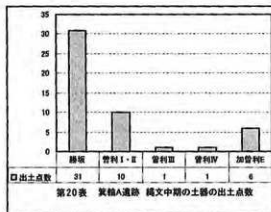
破魔射場遺跡は曾利式、加曾利EⅡ式の割合をみてみると加曾利EⅡ式以外の全ての型式があるが、曾利Ⅳ式段階に確認される資料数が急増することがうかがえる。しかし、曾利Ⅴ式段階は資料数が減少することとなる。



#### (6) 箕輪A遺跡

富士宮市大岩に所在する。これまでの調査により重複する住居址2軒の他、縄文時代中期、後期の包含層が検出されている(富士宮市教育委員会1993, 2001)。

遺跡の全容にははっきりしない部分もあるが、これまでの調査では中期前半の勝坂式土器が出土土器の多くを占めている。また、曾利I～IV式段階の土器や加曾利E式土器も確認されているが、勝坂式土器の出土量には及ばない。千居遺跡で多く確認された曾利V式段階の土器に関しては、今のところは確認されていない(第20表)。



#### 第4節 まとめ

滝戸、天間沢、滝ノ上、破魔射場、南原の各遺跡は縄文時代中期後半の曾利式、加曾利E式段階の土器が主体であり、中期前半の勝坂式土器や縄文時代後期の堀之内式土器も確認されている。

一方、千居遺跡第I・II次調査時の出土土器をみると、前後の時期の土器型式とされる資料が極端に少ないという点が挙げられる。

前後の時期の土器が全く含まれないというわけではなく、第3配石の出土土器のなかには中期前半の土器とみられる破片資料が2点確認できる。また、グリッド出土土器のなかには後期に下る可能性のある破片が2点あり、『千居』でもその可能性が指摘されているが、出土量全体に占める割合はごくわずかであり、千居遺跡第I・II次調査時の出土土器はその大半が曾利IV式、V式段階の土器により占められている。

周辺の遺跡の動向に注目してみると、千居遺跡が立地する富士山西南麓では縄文時代中期段階に遺跡数が増加し、狭い丘陵内で継続性の強い遺跡が営まれる。土器型式の面では曾利式土器が主体的位置を占め、これに加曾利E式土器がわずかに伴い、両者の折衷ともいえる土器があることが指摘されている。この時期の代表的な遺跡として滝戸遺跡、天間沢遺跡、箕輪A・B遺跡が挙げられる。

このような動向をふまえて千居遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査時の出土土器をみても曾利式土器が多数を占め、加曾利E式が少ないということは共通する。

一方で、継続性という面では他の遺跡と異なり、非常に弱いものである。千居遺跡において遺物の出土量が増加するのは曾利Ⅳ式段階であり、このような傾向は破魔射場遺跡や滝ノ上遺跡でもうかがうことができる。

千居遺跡の出土土器が非常に限られた時期の土器のみで構成されるということにはいかなる背景があるかという問題がでてくるが、このことに関しては滝戸遺跡の報告書のなかで曾利Ⅳ式段階に土器の出土量が減少することから天間沢遺跡の事例も合わせて曾利Ⅲ式段階での『飽和』状況、すなわち、人口的な問題を打開するために千居遺跡が成立した可能性が指摘されている(註3)。

本稿では千居遺跡の他に同時期の遺跡の土器組成にも注目して比較、検討を行ったが、それを通してみても曾利Ⅳ式段階に富士山西南麓で居住域の変化がおこり、それが千居遺跡の成立にも影響を与えていることが考えられる。

(註1) 大石寺には復元された土器が保管されていることが『千居』で記述されている。ただし、再整理の時点では『千居』第63図4、第64図6、第65図1、3、および本扉に掲載された土器の計5点に関して現物が確認できなかったため、本稿では全39点として報告する。

(註2) 資料名に関して『千居』では液状口縁の深鉢形土器を「花瓶形土器」、胴部がくびれ、口縁部が外反する深鉢形土器を「甕形土器」として報告していたが、本稿ではこの2者を「深鉢形土器」として報告することとする。

(註3) 馬飼野行雄1997「縄文時代編Ⅰ・遺物 A. 土器」『滝戸遺跡』富士宮市教育委員会

#### <参考文献>

加藤学園考古学研究所 1975『千居』

静岡県清水土地改良事務所・富士宮市教育委員会 1981『滝ノ上遺跡』

富士宮市教育委員会 1983『滝戸遺跡発掘調査(第Ⅳ次)概報』

富士市教育委員会 1984『天間沢遺跡Ⅰ 遺構編』

富士市教育委員会 1985『天間沢遺跡Ⅱ 遺物・考察編』

芝川町教育委員会 1985『南原遺跡 発掘調査報告書』

鈴木 保彦・山本 暉久 1988「加曾利E式土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅰ』

向坂 鋼二 1992「縄文土器の編年」『静岡県史 資料編3 考古Ⅲ』

富士宮市教育委員会 1993「箕輪A遺跡」『富士宮市の遺跡』

高根町遺跡調査会・次郎窪遺跡調査団・株式会社キートン・高根町教育委員会 1996『次郎窪遺跡』

富士宮市教育委員会 1997『滝戸遺跡』

今福 利恵 1999「第2章 山梨県の考古学編年(9)中期後半(曾利式土器)」『山梨県史 資料編2 原始・古代』

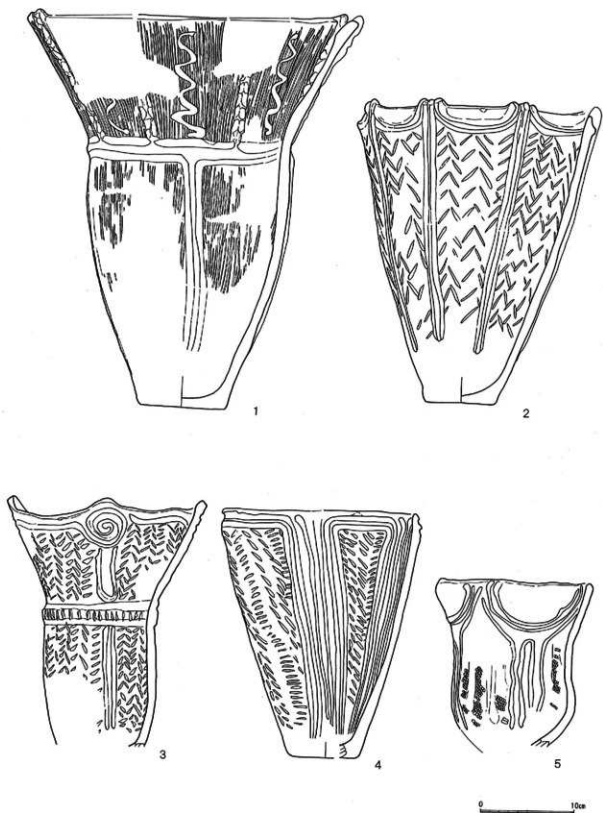
富士宮市教育委員会 2001『箕輪A遺跡』

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001「破魔射場遺跡」『富士川SA関連遺跡』

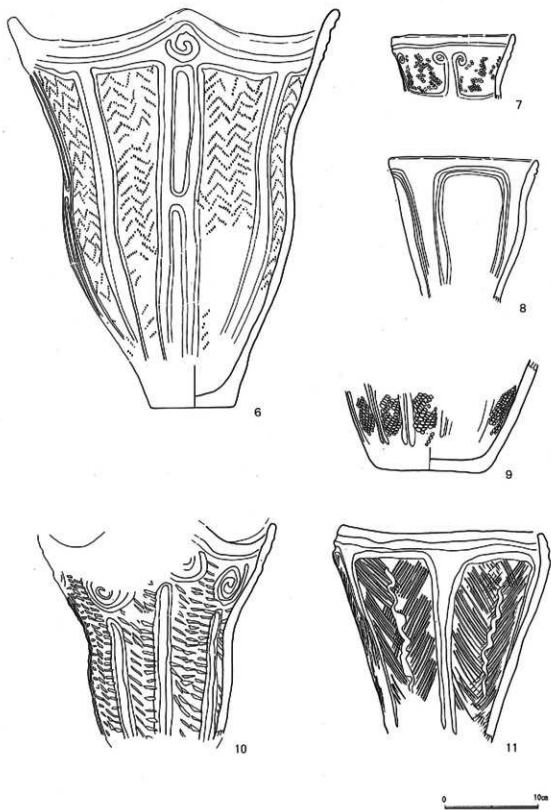
富士宮市教育委員会 2003「2. 寄贈資料報告 (1)大室遺跡」『富士宮市の遺跡Ⅱ』

富士宮市教育委員会 2007『滝戸遺跡Ⅱ』

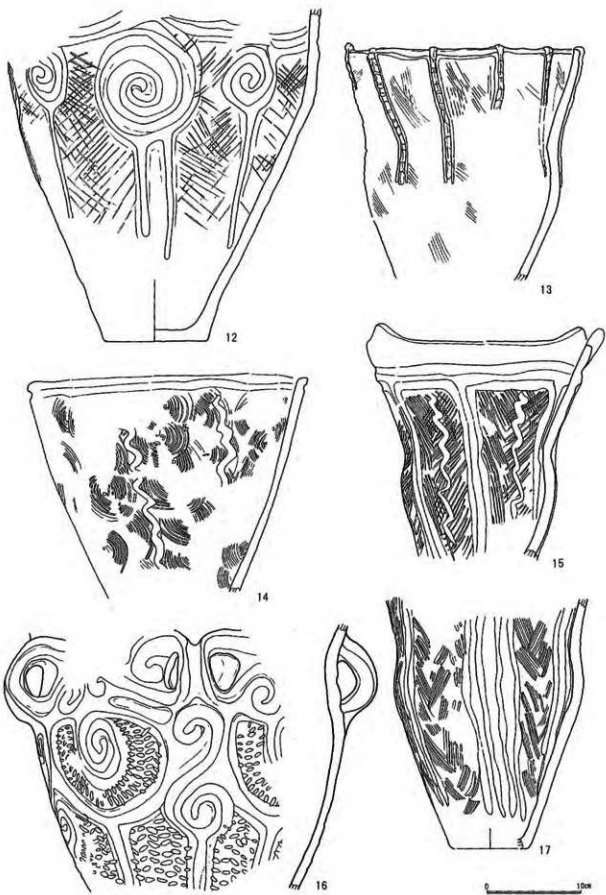
北杜市教育委員会 2008『梅の木遺跡Ⅶ』



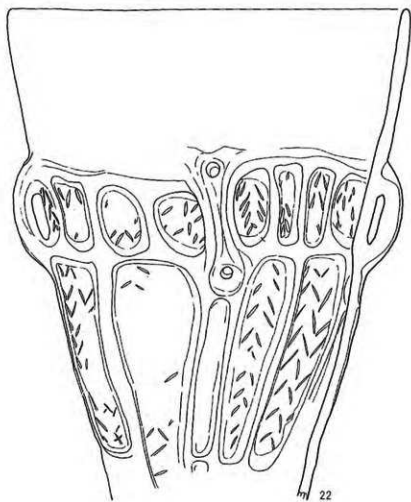
第39圖 第I・II次調査出土土器実測図①



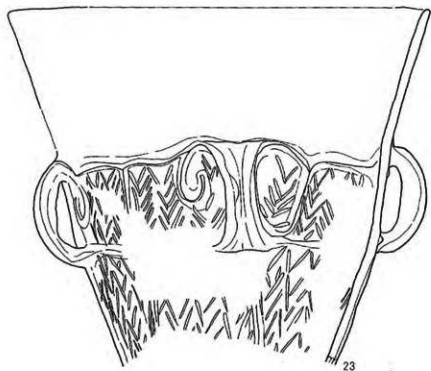
第40图 第I・II次調査出土土器実測図②



第41圖 第I・II次調査出土土器実測図③



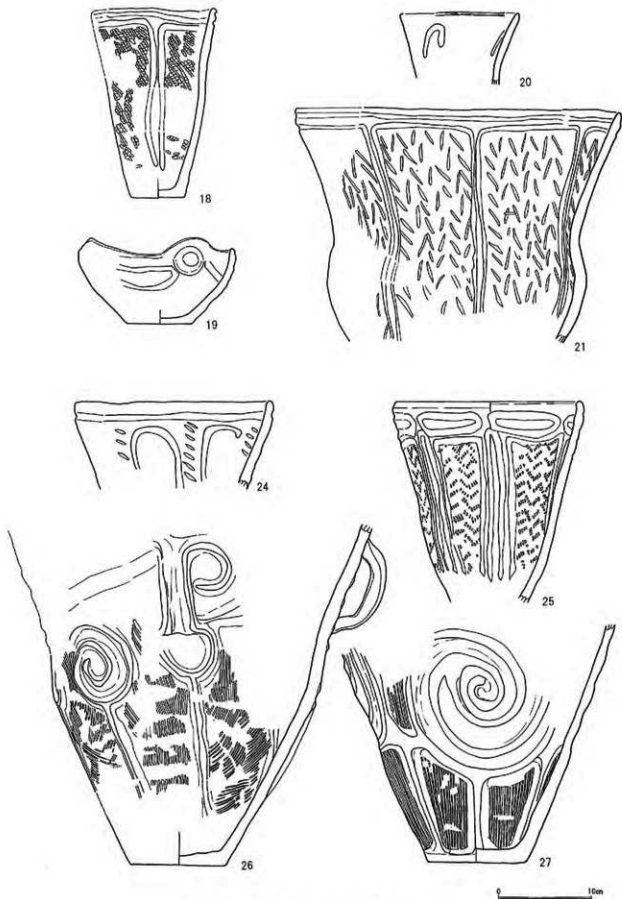
22



23

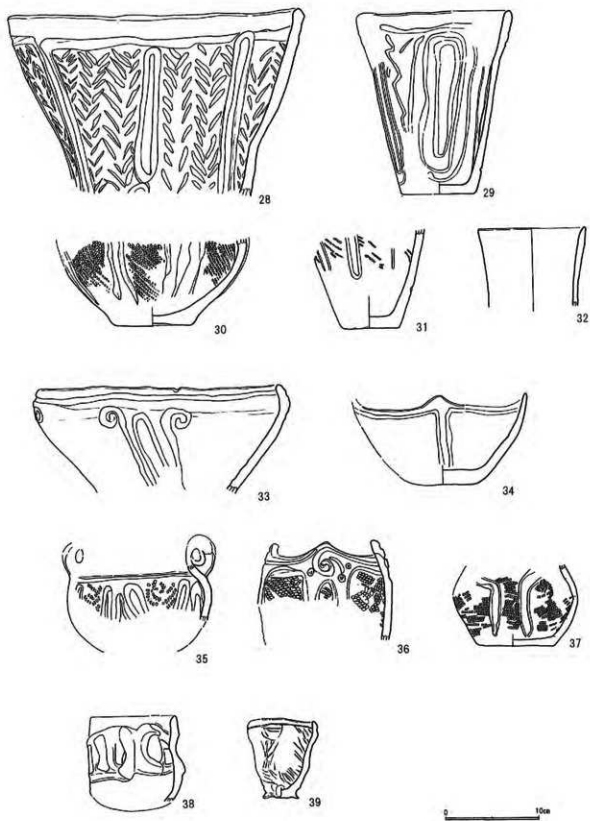
0 10cm

第42图 第I・II次調査出土土器実測图④



第43図 第I・II次調査出土土器実測図⑤





第44圖 第I・II次調査出土土器実測図⑥

第6表 第I・II次調査出土土器観察表

No.	出土場所	器種	計測値				文様	焼色	胎土	色調	備考
			胴高	口径	底径	胴厚					
1	第1住居	深鉢	42.3	35.2	9.4	1.2	隆帯(口縁部~胴上半にかけてツマミ有)、 縦位条線文、垂下沈線	普通	英・長多、砂	赤褐	住居内埋没
2	第1住居	深鉢	32	24.7	8	1.1	遶ハ、沈線を伴う口状隆帯	普通	英・長多、砂	赤褐	伊豆出土
3	第1住居	深鉢	26.4	21.2	—	1.1	遶ハ、隆帯(刻目有)、渦巻沈線	普通	英・長多	橙	伊豆出土
4	第2住居	深鉢	24.8	20.6	—	1.3	遶ハ、口状沈線、垂下沈線	良好	英・長少、砂	明黄褐	住居内埋没
5	第5住居	深鉢	17.2	—	—	0.8	磨消縄文L R、2本の沈線弧文、垂下沈線	普通	英・長少	明褐	
6	第8住居	深鉢	41.2	—	8.6	1.6	渦巻沈線、口状沈線、櫛歯状刺突	普通	英・長多、砂、 霰	黒褐	住居内埋没
7	第8住居	深鉢	6.7	13.3	—	0.7	縄文L R、口状沈線	普通	英・長	黒褐	伊豆出土
8	第8住居	深鉢	22.7	—	—	1.2	二重沈線	普通	英・長、砂	赤褐	住居内埋没
9	第15住居	深鉢	11.5	—	12.2	1.1	縄文L R(一部R L)、沈線	普通	英・長多、砂	明赤褐	
10	第12住居	深鉢	14.7	15.8	—	0.8	渦巻沈線、短沈線、楕円形沈線	良好	英・長多、砂	明赤褐	伊豆出土
11	第13住居	深鉢	22.7	21.7	—	1.1	沈線、縞紗、垂下沈線	普通	英・長多、砂、 霰	明赤褐	住居内埋没
12	第14住居	深鉢	35.1	—	10.6	1.7	隆帯渦巻、格子状(一部斜伏)条線	普通	英・長、砂	黄褐	住居内埋没
13	第14住居	深鉢	24.7	—	—	1.2	隆帯(ツマミ有)、沈線、櫛歯状条線	普通	英・長多、砂	明黄褐	
14	第15住居	深鉢	26.5	23.6	—	0.9	肩状条線、垂下沈線	普通	英・長、砂多	黒褐	
15	第16住居	深鉢	24.1	26.8	—	1.2	縞紗、垂下沈線	普通	英・長多、砂多	赤褐	住居内埋没
16	第16住居	深鉢	28	—	—	1.2	低隆帯渦巻、遶ハ	普通	英・長少、砂	橙	
17	第16住居	深鉢	26.4	—	8.2	1.2	条線文、沈線文	普通	英・長多、砂	暗褐	住居内埋没
18	第18住居	深鉢	20	—	5.6	1	縄文R L、口状沈線	普通	英・長、有	橙	
19	第1配石	深鉢	8	—	7	0.9	円形、楕円形沈線	普通	英・長多、砂	鈍い 褐	
20	第3配石	深鉢	7.6	—	—	0.8	浅い胸手状沈線	普通	英・長多、砂	鈍い 橙	
21	第3配石	深鉢	24.5	34.6	—	1.1	遶ハ文、沈線	良好	英・長多、砂	明黄褐	
22	第1・2土壇	深鉢	51.7	42.2	—	1.4	遶ハ、隆帯区画	普通	英・長少、砂	淡黄	
23	第1・2土壇	深鉢	24.5	34.6	—	1.1	遶ハ、隆帯区画	普通	英・長、砂	明褐	
24	J-17	深鉢	9.3	—	—	0.7	沈線、短沈線	やや 不良	英・長多、砂、 霰	暗褐	
25	L-5	深鉢	21	19.8	—	0.9	楕円形沈線、口状沈線、櫛歯状刺突	普通	英・長、砂	明赤褐	
26	第7配石付近	深鉢	36.2	—	10.3	1.3	隆帯渦巻、斜伏条線文	普通	英・長、砂多	赤褐	
27	第1住居外	深鉢	24.8	—	10.5	1.1	隆帯渦巻、縦位条線	普通	英・長、砂	褐	
28	M-9	深鉢	19.4	31.6	—	0.8	遶ハ、沈線	やや 不良	英・長	明黄 橙	割口に加工痕
29	J-17	深鉢	20.6	16.1	8	0.7	沈線、垂下沈線	普通	英・長、砂多	橙	
30	F-15・16	深鉢	9	—	8.3	0.9	縄文R L、隆帯	普通	英・長少、砂、 霰	赤褐	
31	C-14	深鉢	8.4	—	6	0.8	縄文L R、沈線	普通	英・長、砂多	橙	
32	F-15	深鉢 (小形)	8.6	11.5	—	0.6	なし	普通	英・長、砂	赤褐	
33	B-12	浅鉢	11.2	—	—	1	沈線	普通	英・長	明黄 褐	
34	K-6	浅鉢	9.5	—	3.8	0.8	口状沈線	普通	英・長少	黄橙	
35	E-17	両耳 深鉢 (小形)	8.7	—	—	1.7	沈線、櫛歯状刺突	良好	英・長多、砂、 霰	黄褐	
36	I-16・H-16	深鉢 (小形)	10.6	11.3	—	1	沈線渦巻、円形刺突、縄文L R	普通	英・長、霰	明赤 褐	外面割落激しい
37	M-5	変形 深鉢 (小形)	8.5	—	9.3	1	縄文L R、沈線	普通	英・長少、砂	黄褐	
38	不明(I-15?)	深鉢 (把手付)	8.7	—	—	1	隆帯区画	良好	英・長、砂	黄褐	
39	E-6	深鉢 (小形)	8.4	—	3.8	0.6	鋭い沈線	普通	英・長	明黄 褐	把手の痕跡あり

## 第VI章 まとめ

### 第1節 遺跡の範囲と時期

今回の調査は、丘陵部平坦面に展開する集落と配石遺構がどこまでの広がりを持っているのかという範囲確認調査を目的とした。そのため、史跡指定範囲を中心に周辺に10箇所のトレンチを設定した。

3トレンチの設定箇所は、1978年(昭和53)に加藤学園考古学研究所によって実施された、千居遺跡第3次調査区と一部重なる部分である。千居遺跡の国指定史跡範囲からは東に20～60mほどはなれた小丘陵の斜面にあたるが、1・2トレンチから遺物の出土は確認されず、配石遺構や集落の展開する平坦面とは断絶するようである。

5～8トレンチは、国指定史跡範囲の周辺にあたる。遺物の出土は見られたものの、遺構の確認はなく、出土遺物は配石遺構と集落の展開する平坦面からの流れ込みに伴うものと判断される。

そのため、配石遺構や集落の広がり、現在史跡指定範囲となっている丘陵部平坦面に限られると考えられる。

また、出土遺物は、縄文中期終末の曾利Ⅳ～Ⅴ式段階の土器(深鉢・壺ほか)、石器(石鏃・スクレイパー類・打製石斧・磨製石斧・石錐・磨石・蔽石)、土製品(土器片円盤・土器片鏢)であるが、第Ⅰ・Ⅱ次調査出土資料とほぼ同様の時期の同様の構成のものであり、第Ⅰ・Ⅱ次調査の成果を追認する結果となっている。少量ではあるが、加曾利E式土器の出土も確認された。

### 第2節 周辺の遺跡と千居遺跡

富士山南西麓周辺において、配石遺構が確認された遺跡は、千居遺跡の他に、滝戸遺跡・滝ノ上遺跡、天間沢遺跡(富士市)、羽船丘陵と富士川の接する河岸段丘上に位置する南原遺跡(芝川町)、富士山南西麓からやや離れたはいるが、南原遺跡より直線距離で7kmほど下流の河岸段丘上に位置する破魔射場遺跡(富士市)が挙げられる。

千居遺跡は、縄文中期終末(曾利Ⅳ～Ⅴ式期主体)となる集落及び配石遺構の展開する遺跡である。集落は、竪穴住居跡が、約20基確認されており、環状に配置されている。配石遺構は、いくつかの単位で捉えられており、立石や敷石を伴い環状に配置される配石、丘陵の傾斜に並行に列状に配置される配石、丘陵の傾斜変換にそって弧状に配置される配石、コの字状の石囲いとなる配石、礫の分布は密であるが、比較的散漫な分布状況である配石と、様々な形態のものが確認されている。このうち、立石や敷石を伴い環状に配置される配石は、敷石住居と考えられるとの見解もある(石坂2007)。竪穴住居跡と配石遺構は一部重複するが、ほとんどが重複した位置には構築されていない。集落及び配石遺構は、南西方向に傾斜する丘陵部平坦面(規模:北東-南西70m×北西-南東60m)の範囲内に構築されている。

千居遺跡の竪穴住居跡及び配石遺構は、曾利Ⅳ式段階と曾利Ⅴ式段階の2時期に分けられており、竪穴住居跡数は曾利Ⅳ式段階から曾利Ⅴ式段階へ減少し、集落の規模は縮小傾向にある。配石遺構は、反対に曾利Ⅳ式段階から曾利Ⅴ式段階へ大規模な配石が構築されるなど、拡大傾向にある。また、配石遺構は、集落の中央広場に傾斜に並行に構築された列状の配石が先行して構築され、傾斜変換点に沿うように構築された弧状の配石が次段階に構築されたとされている(加藤学園考古学研究所1975)。配石遺構は、集落と同時期に構築が開始されたとされているが、曾利Ⅴ式新段階の比較的短い期間内

で行われたとする見解もある(石坂2004)。

滝戸遺跡は、縄文時代早期前半から後期後半までの遺跡で、中期前半から後期前半が主体となる。潤井川に侵食されて形成された星山丘陵の舌状台地上に位置し、東西30m、南北20mほどの狭い平坦面に密集して遺構は展開している。調査区内は、富士山起源の溶岩が露呈し自然礫が多く散乱し、また遺構の重複も著しい状態であったものの、曾利Ⅰ式段階には環状配石、曾利Ⅲ～Ⅴ式段階には列状配石、環状配石、堀之内式段階には積石状の配石が確認されている。住居跡は、炬跡の配置から曾利Ⅱ式段階の4軒が確認されているが、この時期には配石遺構は構築されていない。

滝ノ上遺跡は、縄文時代早期末～前期初頭の木島式期、中期前半の勝坂2式期、中期後半の曾利Ⅲ・Ⅴ式段階の遺跡で、他の遺跡に比べ曾利Ⅴ式土器の出土が多いように見受けられる。道路幅の狭い範囲ではあるが、墓塚と考えられる配石遺構と、石棒と焼土を伴い環状というより一辺3mほどの方形に敷石される遺構の確認された地区と、3m程の空白地帯を挟んで礫集中区域が幅3～4mの弧状に広がる地区がある。墓塚は曾利Ⅴ式段階、配石遺構は遺物の出土が少ないようであるが、曾利式期に比定されている。

天間沢遺跡は、先述の滝ノ上遺跡から直線距離で2kmほど下った丘陵上に位置し、縄文中期中葉～後期前葉までの勝坂3式～堀之内Ⅰ式期に継続する集落と配石遺構が確認された遺跡である。遺跡の中心と考えられるB・C・F地区では、中期終末の曾利Ⅳ～Ⅴ式段階に、下部に土壌を伴う配石が確認されている。この配石は、礫集中範囲で捉えられており、直径40mほどの円形と想定され、ここから10mほど空白域を挟んで、長さ20m、幅15mほどの範囲にも確認されている。また、この地区から上方の横道下地区では、下部に土壌を伴わない石が確認されている。この配石は、礫集中範囲で捉えられており、東西25mほどで南北5mほどの北配石、溶岩の露頭部を囲むように比較的散漫に礫が分布し、全長45mほどで幅5m範囲の南配石が確認されている。いずれも遺物は少ないものの、北配石は曾利Ⅰ～Ⅱ式段階、南配石は曾利Ⅳ～Ⅴ式段階と考えられる。

南原遺跡は、250㎡ほどの狭い範囲に、縄文時代中期後半～後期前半の多数の土壌と配石遺構を確認している。遺構分布はさらに広がると考えられる。配石遺構は、土壌の上面に帯状で確認され、10m×8mほどのL字状となっている。土壌内出土の土器は、曾利Ⅳ～Ⅴ式期のもの主体であり、配石遺構は堀之内式期に伴うのかもかもしれない。

破魔射場遺跡は、東名高速道富士川サービスエリア建設のために調査されたため、比較的広範囲にわたる調査が行われている。縄文時代中期後半～後期前半の集落と配石遺構が確認されており、竪穴住居跡と配石遺構の分布域が明確に分けられている。曾利Ⅳ～Ⅴ式段階には、丘陵上平坦面に展開する集落を囲むように、西に配石を伴う土壌群及び土壌群の間に展開する全長7mほどで幅1.5mほどの礫集中範囲が、東に10単位で捉えられている配石遺構が確認されている。続く堀之内Ⅰ式期には、前代には竪穴住居跡が展開していた平坦面まで配石遺構が構築されるようになり、地形の傾斜に並行に構築される長さ14mほどと長さ10mほど列状の配石遺構をはじめ、礫集中範囲が円形となる配石遺構や下部に土壌を伴う配石などが17単位で捉えられている。また、この時期には柄鏡形敷石住居が確認されている。次段階の堀之内2式期では、配石遺構は構築されず、配石遺構の範囲内に集落が構築されるようになるとされている。

以上、富士山南西麓の配石遺構の確認された遺跡を概観したが、いずれの遺跡も中期終末の曾利Ⅳ～Ⅴ式段階に活動の痕跡が見られる。また、狭い範囲の発掘調査である滝ノ上遺跡・南原遺跡を除き、千居遺跡・滝戸遺跡・天間沢遺跡・破魔射場遺跡では概期の集落が展開する。配石遺構出土の遺物がどの遺跡でも少ないため時期判定には困難を伴っているものの、配石遺構と集落の分布域には区域分

けが存在するようである。

配石遺構が、円形の礫集中として確認される滝戸遺跡・天間沢遺跡と、列状あるいは弧状として確認される千居遺跡・南原遺跡・破魔射場遺跡、配石を伴う土壌が確認される滝ノ上遺跡・破魔射場遺跡に分けられる。このうち、円形の礫集中として確認される場合、下部に土壌あるいは埋嚢を伴っている。列状あるいは弧状として確認される場合、下部に土壌などを伴わない千居遺跡・破魔射場遺跡と、下部に土壌が確認された南原遺跡がある。

### 第3節 千居遺跡の特異性

第1章にも記述したが、富士山南西麓においては、縄文時代中期終末の曾利IV～V式段階は遺跡数が増加する時期にあたる。配石遺構の確認された遺跡のうち、千居遺跡以外の遺跡においては前段階からの継続性あるいは次段階への継続性が見られるが、千居遺跡は比較的短期間に集落や配石遺構が構築される遺跡である。

また、配石遺構の規模においても、千居遺跡のように全長40mほどの大規模な弧状となるものが確認される遺跡は富士山南西麓では他にはなく、このような配石遺構が確認される関東山地よりから長野県や山梨県にかけての範囲で検出される例も7例のみであるとされる(石坂前出)。

千居遺跡では、記録保存のために下部構造の調査は行われていないため、下部土壌の存在については不明であるが、破魔射場遺跡例などをみると下部構造がない可能性があると考えられる。下部構造がある場合には、滝戸遺跡や天間沢遺跡のように円形の礫集中範囲として確認されている。

遺跡の選地にしても、それまでは、遺跡分布範囲とならなかった土地へと飛び出すような位置にあり、これまで論じられてきた分村化の動きの中で、加えて何らかの理由があるように思われる。

### 第4節 おわりに

千居遺跡は、縄文時代中期終末の集落と共に大規模配石遺構が構築された遺跡としては、貴重な遺跡である。配石遺構を構成する礫には、重量300kgほどもある大石が含まれ、石材の鑑定では潤井川や富士川あるいは芝川から運んできた可能性が高いとされた(注1)。礫の運搬は人手を多く必要としたと考えられる。

近年、配石遺構と夏至や冬至の日の出日の入りの方角などと山岳とを関連付けて再構築する研究が進んでいる(小林編2002 他)。実際、千居遺跡からの夏至の日の出を確認してみたが、前方の林に遮られてはっきりとは見られなかったが、日の出は富士山麓の中腹から上った。

配石遺構の捉え方をはじめ、千居遺跡の配石遺構は何のために構築されたのかという問題には、さらなる研究が必要と考えられる。

注1 北垣氏教示。

<参考文献>

加藤学園考古学研究所 1975 『千居』

芝川町教育委員会 1985 『南原遺跡発掘調査報告書』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001 『富士川S A関連遺跡』

富士市教育委員会 1984 『天間沢遺跡Ⅰ』遺構編

富士市教育委員会 1985 『天間沢遺跡Ⅱ』遺物・考察編

静岡県清水土地改良事務所富士市教育委員会 1981 『滝ノ上遺跡』

富士宮市教育委員会 1997 『滝戸遺跡』

石坂 茂 2007 「環状列石(関東・中部地方)」『心と信仰 宗教的観念と社会秩序』縄文時代の考古学11

石坂 茂 2004 「関東・中部地方の環状列石-中期から後期への変容と地域的様相を探る-」

『研究紀要22』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

川添和暁 2007 「東海地方の諸遺跡」『季刊考古学』第101号

小林達雄 編 2002 『縄文ランドスケープ』

山本暉久 1999 「遺構研究 配石遺構」『縄文時代』10 第3分冊

## 報告書抄録

ふりがな	くにしていしせきせんごいせきはんいかくにんちようさほうこくしよ						
書名	国指定史跡千居遺跡範囲確認調査報告書						
副書名	富士山世界遺産登録推進事業に伴う遺跡範囲確認調査報告書						
巻次							
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第42集						
編著者名	馬飼野行雄 佐野恵里 石文佑弥						
編集機関	富士宮市教育委員会 教育文化課						
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150番地 Tel.0544-22-1111(代)						
発行年月日	平成22年(2010)3月19日						
遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡				
千居遺跡	ふじのみやましかみじょう 富士宮市上条 あざまんご 字千居1818-9 他	22207	市番号 66	35° 17' 29"	} 20080901	161.5	富士山世界遺産登録 推進事業に伴う学術 発掘調査
			県番号	138° 38' 14"			
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構		主な遺物		特記事項
千居遺跡	散布地	縄文(中期後半)	なし		土器・石器		遺構分布範囲の確認

富士宮市文化財調査報告書 第42集

### 国指定史跡 千居遺跡範囲確認調査報告書

—富士山世界遺産登録推進事業に伴う遺跡範囲確認調査報告書—

平成22年3月19日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150番地

(0544) 22-1111(代)

印刷 三扇美術印刷株式会社

〒418-0056

富士宮市西町1番15号

(0544) 26-3636(代)

# 写真図版





1. 千居遺跡現況



2. 千居遺跡空撮(加藤学園考古学研究所 1975『千居』より転載)



1. 1 トレンチ完掘状況



2. 2 トレンチ完掘状況



1. 3 トレンチ完掘状況



2. 4 トレンチ完掘状況



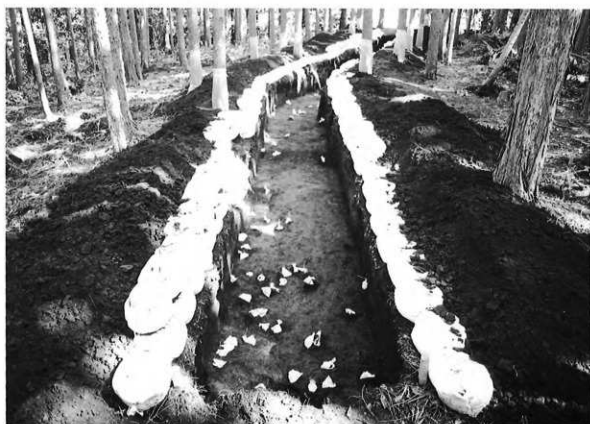
1. 5 トレンチ完掘状況



2. 6 トレンチ完掘状況(東側)



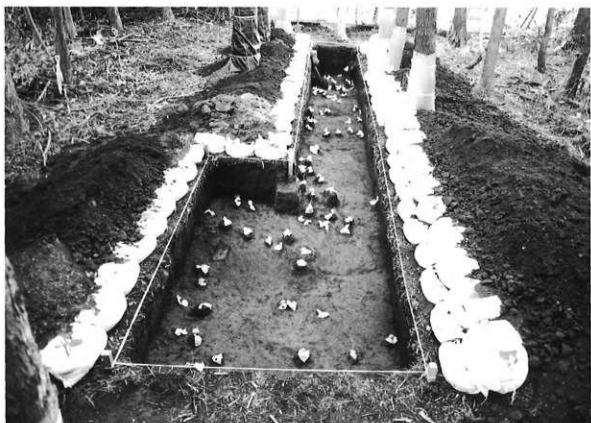
1. 6 トレンチ完掘状況(西側)



2. 6 トレンチ遺物分布状況



1. 7トレンチ完掘状況



2. 7トレンチ遺物出土状況



1. 8 トレンチ遺物出土状況



2. 9 トレンチ完掘状況

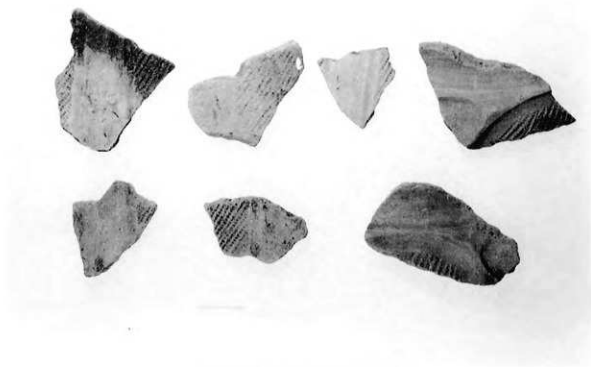


1. 10トレンチ完掘状況



2. 出土土器(曾利式土器)





1. 出土土器(加曾利E式土器)



2. 出土土器(その他の土器)・土製品(土器片円盤・土器片錘)



1. 出土石器 1



2. 出土石器 2



1. 第1・II次調査出土土器 1



2. 第1・II次調査出土土器 2



1. 第1・II次調査出土土器 3



2. 第1・II次調査出土土器 4



1. 第 I・II 次調査出土土器 5



2. 第 I・II 次調査出土土器 6